

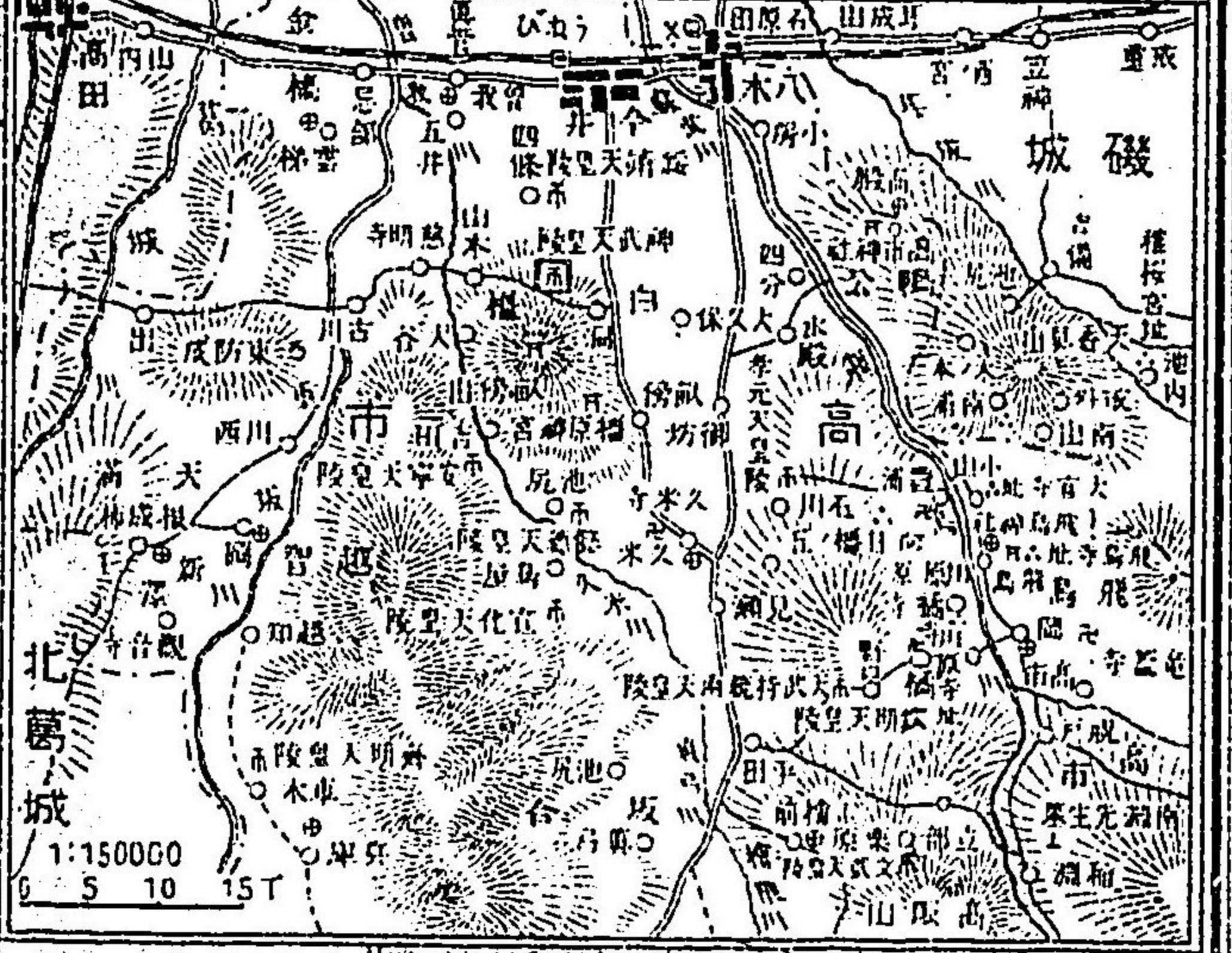
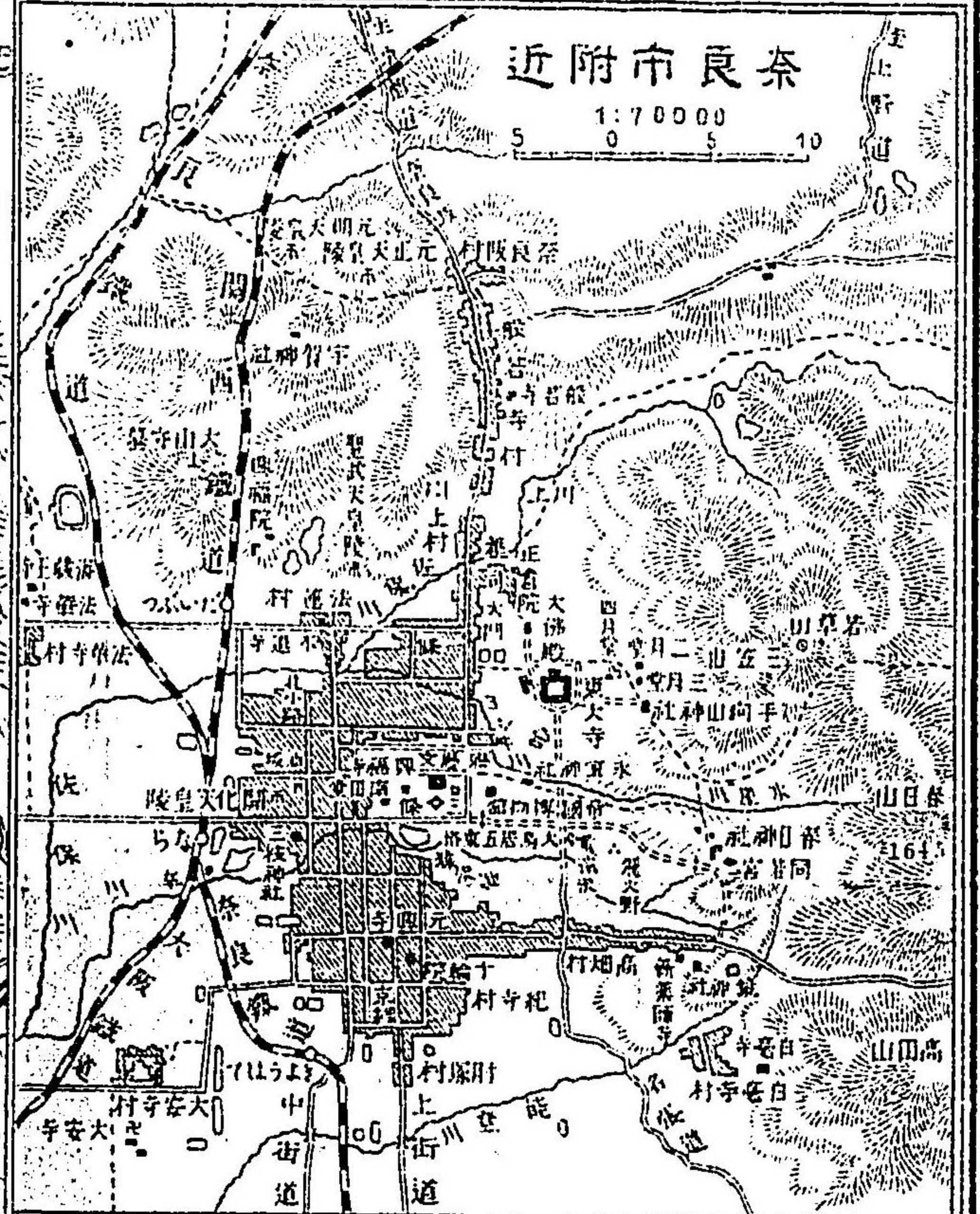
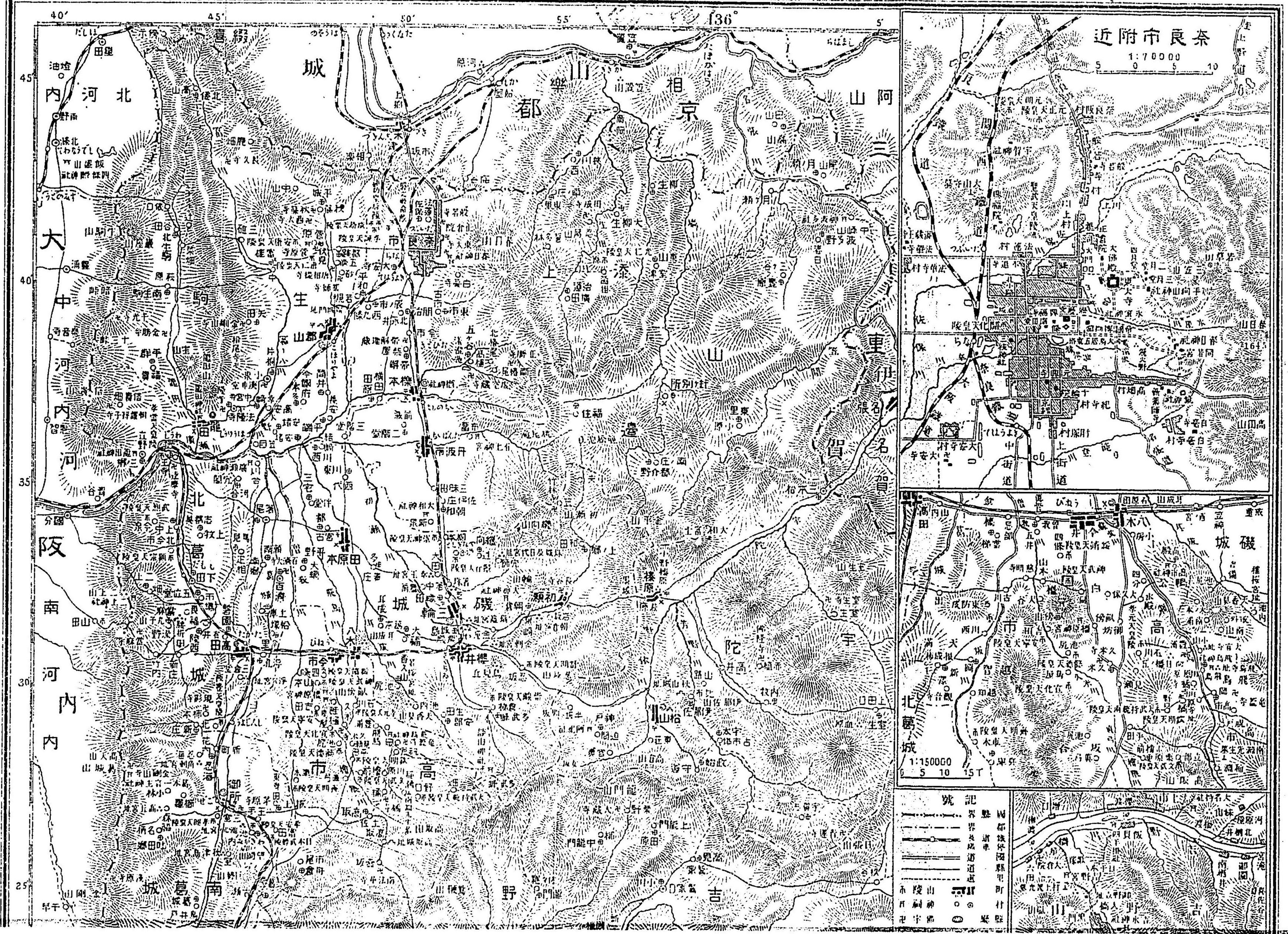
大和名勝

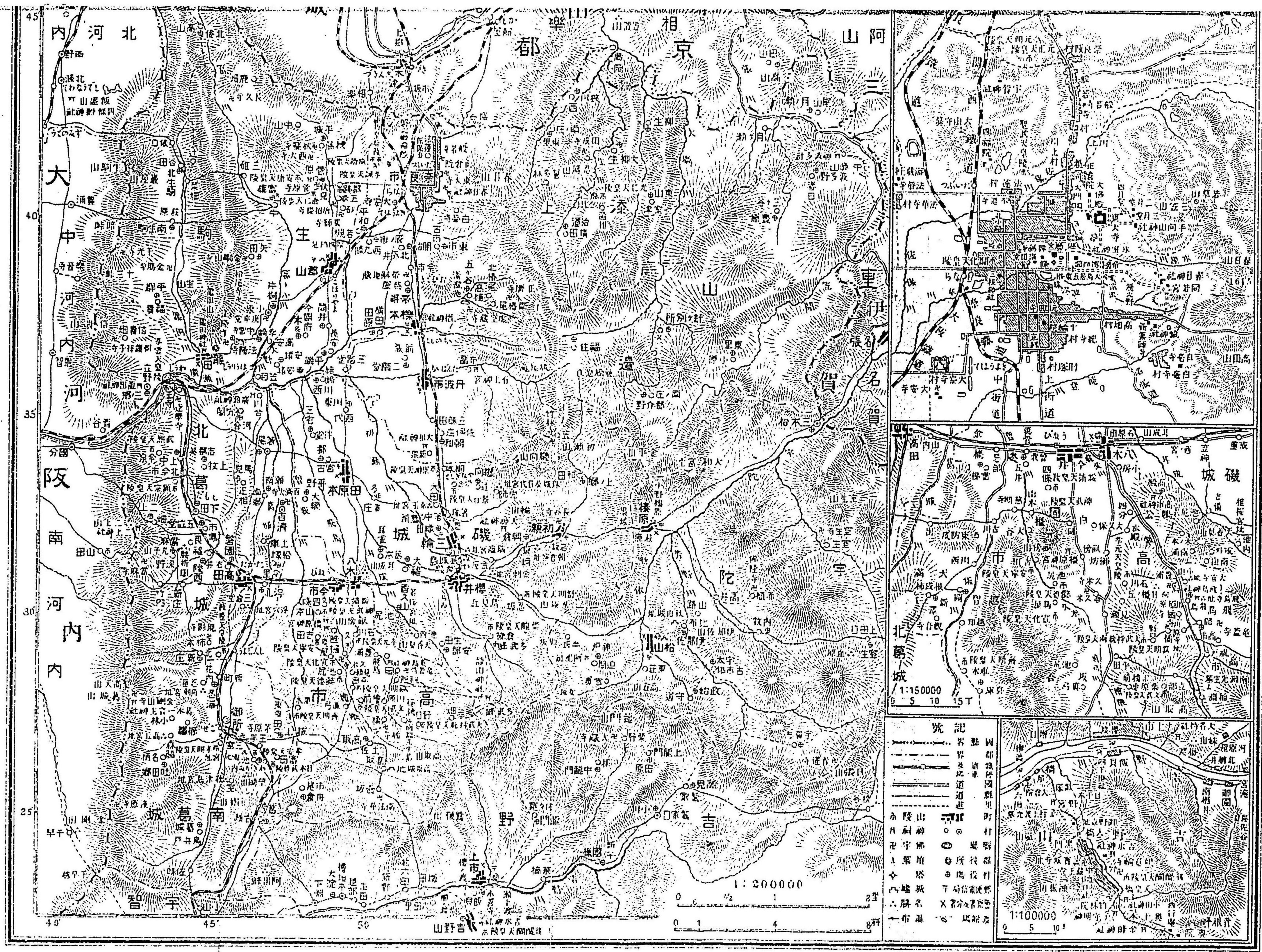


9

15

北龍大和之圖





記号

——	境界
——	市界
——	町界
——	村界
——	道
——	河川
○	市街
○	町街
○	村街
○	寺
○	神社
○	塔
○	城
○	山
○	湖
○	池
○	沼
○	田
○	畑
○	森林
○	雪
○	氷
○	霧
○	雲
○	雨
○	雪
○	氷
○	霧
○	雲
○	雨

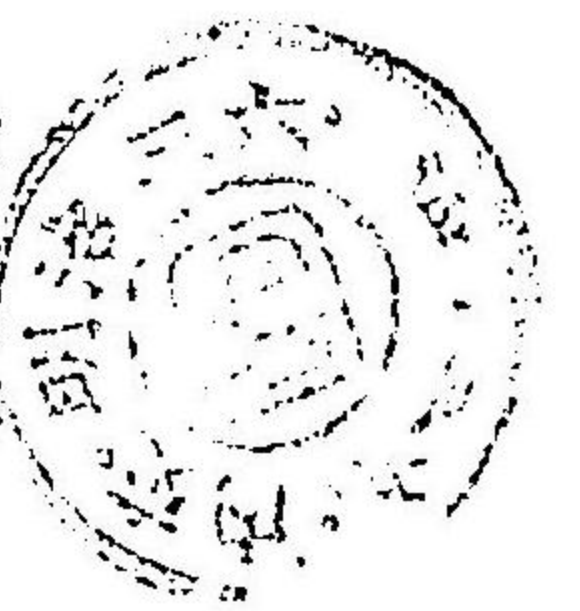
94-122

大和名勝

緒言

汽笛の響は文明の音なり。汽笛は瞬間に人を東西にし、人を南北にす。名勝は一區に集まれるにあらず、或は西に或は東に、さては南に、さては北に、或は花にその名を得、或は月にその勝を擅にす。かざれば之を探り之を尋ねん者、一處に彷徨して得べからず、一時に萬勝を探見することを得ず。汽笛は人を瞬間に思ふ處に走らしめ、春夏秋冬容易にその地に赴かしむ。嗚呼文明の世に在りて、天下の名勝を探見す、豈夫れ難事ならむ。

蓋し名勝は國の裝飾物たり。國の紀念物たり。國の品位を保ち、國



の歴史を存し、見る者をして文學的たらしめ、美術的たらしめ、又歴史的感想を起さしめ或は尊王愛國或は敬神博愛の念慮を起さしむるものは、名勝の効なり。試に思へ、如何に無風流なる者も、嵐峽堰川に棹をさして花の夕を訪ひ、須磨明石の海邊を逍遙して月の繪島を望まば、營々射利の念も暫しは忘れて、天地自然の美を感ずべし。又落葉颯々たる芳山の陵を拜し、腥風身にしむ博多の灣を望まば、誰か南北朝の當時を慨し、蒙韓無禮の昔時を憤らざるものあらん。此に至りては、名勝は歴史文學美術の講義の夫よりも人を感動せしむること多し。嗚呼名勝は、實に不滅の教科書なり。

に文明の餘徳は、汽笛一聲、我が身をして南北に飛ばしめ、東西に馳せしめ、自由自在に、しかも知日月を以て、この高尚なる慾望を充さしむるに至れり。嗚呼誰かこの恩徳に浴せざる。汽笛は文明の響にして、また名勝探見の先導者たり。

然れども名勝は、その由來を知らざれば、その樂みと益とを得ること少し。荷も之を知らば、一草一本も、自からその趣を増し、一壚一壘もその感を深うし、人をして低徊去ること能はざらしむるに至る。さはれ無数の名勝、いかで兼て諸知することを得ん、此を以て早く各國志の撰あり、名所圖會の編あり、近來又名勝案内等の書籍々發行せられ、この道探見の槩を爲せり。本書もまたその類に倣ふものとはいへ、獨得の見なきにあらず。

余曩に歐米に航し、彼のペドカー氏の案内書によりて、大に得る處あり、竊に我が國にても、かゝる案内書の成らんことを希ひたりき。この書は素より彼書に倣ふとはならず、僅に名勝の一斑を記述し、その由來の概畧を知らしめんことを期せり。かくの如にして、全國名勝悉く編述し了らば、更に精を説き微に入り、題するに日本名勝志を以てせんとなす。

この書その本づく所は國志及び名所圖會なり。然れども時勢の變は、又大に彼等の所載と異なるもの多し。そは多くは自らその地を踏査して記し、又はその地方の人につきて聞きたることを併せ説けり。若し誤謬疎漏あらば再版を期して訂正せん。今や海に陸に文明の餘音は汽笛を假りて響きわたれり。有爲の青年

たるもの、春夏秋冬の好季を撰んで、以て名勝を採見し、不滅の教科書に對して、神を鍊り、膽を鍛ふべし。この書その同伴ともならば、編者の幸この上あるべからず。

明治三十六年二月

藤園主人識

千里の道も一歩より
百聞も一見に若かす

大和名勝目次

大和國	一
添上郡	四
奈良市	
春日神社	三笠山
鏡神社	白毫寺
解地蔵	榎木町
の池	十三鐘
般若寺	聖武天皇御陵
天皇御陵	率川大神御子神社
ヶ瀬	
生駒郡	五

平城宮趾……………磐之姬御陵……………平城天皇御陵……………孝謙天皇御陵……………成務天皇御陵
 ……神功皇后御陵……………水上池……………秋篠寺……………西大寺……………菅原神社菅原寺
 ……安康天皇御陵……………垂仁天皇御陵……………唐招提寺……………藥師寺……………郡山町
 ……小泉町……………宮の小川……………生駒山……………法隆寺……………中宮寺……………龍田神社
 北葛城郡……………
 廣瀨神社……………廣瀨川……………達磨寺……………二上山……………當麻寺……………浮孔宮趾……………
 腰折田……………歌家……………高田町……………飯豐天皇御陵……………顯宗天皇御陵……………武烈天
 皇御陵……………孝靈天皇御陵……………
 南葛城郡……………
 角刺宮舊趾……………御所町……………葛城山……………葛木坐一言主神社……………金剛山寺……………
 樞原宮趾……………腋上藤間丘……………孝昭天皇御陵……………孝安天皇御陵……………日本武尊御
 陵……………吉祥草村……………巨勢山……………葛温泉……………

宇智郡……………九一
 五條町……………榮山寺……………阿陀墓……………後阿陀墓……………井上内親王陵他戶親王墓……………
 ……地福寺……………
 山邊郡……………九五
 石上布留御魂神社……………桃尾瀧……………天理教會本部……………大和神社……………
 磯城郡……………一〇〇
 柳本町……………崇神天皇御陵……………景行天皇御陵……………珠城及日代宮趾……………經向山及
 經向川……………菅塚……………三輪町……………三輪山……………大神大物主神社……………瑞籬宮趾……………
 ……泊瀬朝倉宮趾……………金刺宮趾……………幸玉宮趾……………舒明天皇御陵……………泊瀬山及
 泊瀬川……………長谷寺……………竹林寺……………多武峰談山神社……………如覺禪師墳……………崇峻
 天皇御陵……………池邊雙磯宮趾……………玉穗宮趾……………櫻井町……………斑栗宮趾……………稚櫻
 宮趾……………天香具山……………耳成山……………田原本町……………

高市郡

今井町..... 畝傍山..... 神武天皇御陵..... 一三二

..... 懿德天皇御陵..... 孝元天皇御陵..... 榎原神宮..... 安寧天皇御陵.....

..... 宣化天皇御陵..... 齊明天皇御陵..... 欽明天皇御陵..... 久米寺..... 益田池の碑.....

..... 天武持統兩天皇御陵..... 文武天皇御陵..... 高取山城趾..... 檜隈川

..... 橋寺..... 飛鳥川..... 飛鳥神社..... 廢飛鳥寺、廢川原寺、廢大官大寺..... 壺坂寺.....

..... 寺..... 雷丘..... 南淵先生墓..... 岡寺..... 八重事代主神社..... 向原

宇陀郡

..... 小野榛原..... 伊那佐山..... 日張山..... 大藏寺..... 室生寺..... 一四五

..... 秋山城趾..... 松山町.....

吉野郡

..... 吉野山..... 吉野川..... 柳の渡..... 一の坂..... 長峰..... 歌家..... 一四九

..... 吉野宮.....

..... 村上義光墓..... 嵐山..... 一目千本..... 御野立趾..... 大橋..... 鷺門.....

..... 吉野町..... 銅鳥居..... 仁王門..... 藏王堂..... 實城寺趾..... 吉水神社.....

..... 山口神社..... 袖振山..... 村上義隆墓..... 如意輪堂..... 小楠公髻塚碑.....

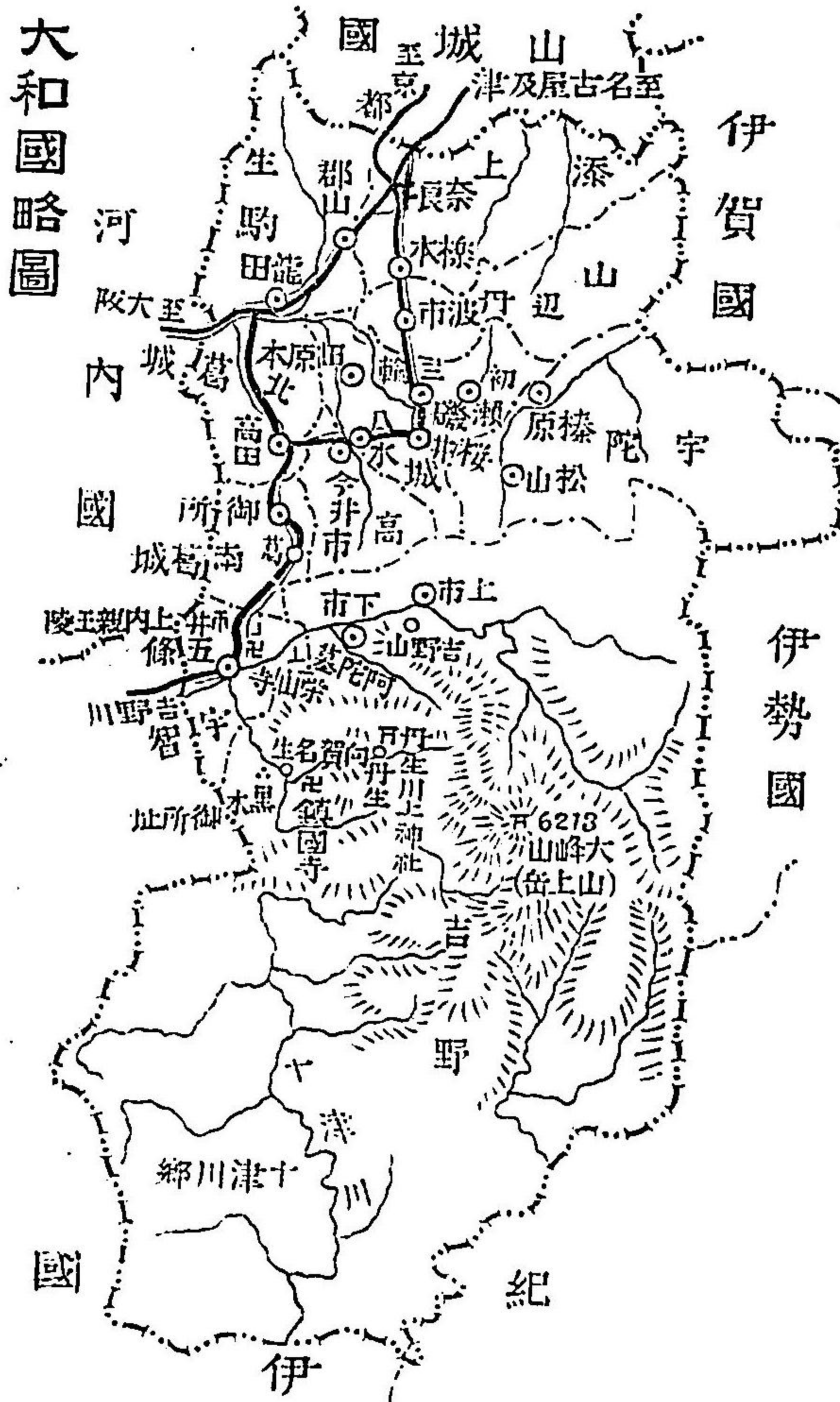
..... 後醍醐天皇靈殿..... 塔尾御陵..... 世泰親王墓..... 中の千本..... 竹林院.....

..... 上の千本..... 雲井櫻..... 吉野水分神社..... 金峰神社..... 蹴拔塔..... 青根が

..... 峰..... 西行菴..... 大峰山..... 丹生川上神社..... 賀名生行宮趾..... 黒木御所

..... 華鯨櫻..... 鐘國寺..... 源親房墓.....

大和國略圖



(大和國) (六)

大和名勝

大和國

藤園主人述

大和國は我が國最古の皇都たり。神武天皇、橿原宮に即位したまひし以來、列聖相承け、この地に都せられしが、元明天皇の朝に至り、唐の長安城の制に倣ひ、奈良の地に都を奠め、大宮殿を起し、條坊を立て、以て從來の面目を一新せられたり。これ實に神武天皇紀元以後一千三百七十年和銅三年、庚戌なり。是より先、孝德天皇の時、大化改新の政を施され、宮城の制を初め、八省百官をも立てられしが、此に至つて、愈完備せるなり。爾來凡そ百年、元正、聖

(一) (大和國)

武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁の諸朝を經、桓武天皇の延暦三年に至り、山城に遷都せられたり。かゝればこの國は我が歴史の本づく所ともいふべく、我が民族に最も關係深き地なり。古來我が日本の總稱をヤマトと稱ふるも、皇祖の都の此の地に在りしより擴がりし名にして、日本の字を即ちヤマトと訓するもこの義なり。故に山城遷都以後も、この國をば南都と稱し、以て四畿の上に列せられたること、恰も明治維新東京遷都後、山城を以て、猶京都と稱し、府と稱して縣の上に位せしめられたるがごとし。延元の亂、後醍醐天皇この國に入らせられ、遂に吉野山を以て皇居となし、爾來殆ど六十年後龜山院に至る。世に之を南朝と稱せり。この國の疆域は、東は伊勢伊賀二國に境ひし、西は河内、南は紀伊、

北は山城の界に至る。幅員東西十六里十町、南北二十五里十九町、面積二百一万里四分二厘なり。古來添上、添下、平群、廣瀬、葛上、葛下、忍海、宇智、吉野、宇陀、城上、城下、高市、十市、山邊の十五郡に分たれしが、明治二十九年、法律を以て添下郡平群郡を廢し、その區域を以て生駒郡を置き、廣瀬郡及び葛下郡を廢し、その區域を以て北葛城郡を置き、城上郡、城下郡及び十市郡を廢しその區域を以て磯城郡を置き、葛上郡及び忍海郡を廢しその區域を以て南葛城郡を置かれたり。今は一市十郡にして、人口總計五十三萬八千五百七人なり。縣廳は奈良に在り。そもこの國は前述のごとく、我が最舊歴史の起れる處なれば、一たびこゝに入れば、耳目の觸るゝ處一として歴史的ならざるはな

し。彼の仰ぎ見る畝傍香具山耳梨の三山は更なり、佐保川の細き流れ、猿澤の池のさよなみに至るまで、悉く往事を忍ぶよすがたらざるはあらず。以下その名勝の概畧を叙して、この地に遊ぶ人のこるべとせん。

添上郡

奈良市

奈良市は本國の北端添上郡の西北部に位せる惟一の市街なり。東方に春日山を負ひ、西方遙に金剛葛城生駒の諸嶽を望む。いはゆる四禽圖に叶ふ地にして、七朝の皇都たりけん面影今猶忍び奉らる。市街の廣さ東西一里三十町南北一里二十町、縣廳、市役所以下裁判所

警察署等、諸官衙此に在り。戸數五千六百十三、人口三萬五百三十九人と注せらる。

奈良鐵道開通してより市街に三ヶ所の停車場を設く。曰く奈良驛(市の西端三條通りに在り)曰く京終驛(市の南端に在り)曰く大佛驛(市の西北端即ち大佛の邊に在り)。この三驛は何れも諸鐵道線に聯絡すれば京阪地方より入るも、名古屋伊勢地方より入るも自由なり。旅館は、春日神社、大佛等の近傍には閑靜なる武藏野亭、對山樓、菊水樓等の諸館あり、又興福寺前、猿澤池附近には、維新前より、この業を営み來れる。印判屋魚屋鎌屋その他諸館軒を接し孰も能く客を遇す。

謹でこの地の歴史を按ずるに初め神武天皇橿原奠都以來歴代の天皇

相承け、今の高市磯城郡等の地に多く都せられしが、孝徳天皇都を難波に遷して大化の改新を遂げられ、天智天皇は近江に都を奠めて革新の政を施されしが、その後再び大和舊都の地に遷られしに、元明天皇の朝に至り、大に百政改革の必要生じ、その和銅二年に及んで、奈良の都を建て、同三年初めて此に都を遷されたり。(遷都の詔は和銅元年二月に在りて續紀に載せたり。時の謀臣は左大臣石上朝臣鷹、右大臣藤原朝臣不比等、大納言大伴宿禰安麿等なり。)

この皇城の制は、唐の長安城に象られたるものにして、左右兩京に分ち(又東京西京とも云ふ)その北端に南面に大内裏をおこし、その正門を應天門とし、夫より一直線に大路を設け、その至り止まる所に羅城門を建て京城の入口とす。かくて兩京には一條よ

り九條に至る區劃を爲し(大内裏は一條二條の間に在り)其終を京極とす。聖武天皇に至り大内裏の東方に東大寺を起し、孝謙天皇の時西方に西大寺を建て相對して王城を衛らしむ。春日山は東大寺の上より起りて、南高圓山につゞき、佐保川は鶯瀧より出で京中の西北を貫きて添下郡に入る。その規模の宏大なりしこと想像すべし。然るに桓武天皇都を山城に遷されし以來漸次故京となり、さばかり廣大なりし王城の跡も年と共に廢頽して、たゞその名残を忍ぶまでになりぬ。萬葉集に、「青丹よしならの都は咲花のにはふがごとく今さかりなり」といひ、「白かねの目ぬきの太刀をさげはきて奈良のみやこをねるは誰が子ぞ」といひたる當時と、古今集に、「ふるさとくなりにし奈良のみやこにも色はかはらず花はさきけり」又保安百首に

「すみれさくならのみやこの趾とては石ずるのみぞかたみなりける」
なごあるを思ひ合せてその盛衰の状を知るべし。
今の奈良の町は、即ち當代の左京より京外東山に續ける地にして
右京即ち西京は早く棄たれたるなり。大内裏の趾といへるは、今
の生駒郡平城村字都跡といへる地方にて先年この道の人々の考證
によりて大内裏舊跡の由記したる標石建てあり。この邊は總て田圃
にして、その左方に鎮守の森あり。この舊趾より見わたせば、東西
兩大寺の中央に位して、右に生駒左に春日の山嶽相向ひ、南西遙に
葛城金剛を望み當時の形勢想像するに難からず。
思へば皇祖皇宗の遺訓を發揮し、隋唐文明の萃を抜き、此地に都を
奠めて海内に君臨し、政治に宗教に教育に文學に殖産に軍事に、そ

の聖蹟を盡したまひけん七都殆ど百年の盛況は實に彼の八重櫻の咲
匂ひしが如くならんか。後の京都の文明も此に基づき、明治今日の
開化もまたこゝに淵源するところなきといはんや。

春日神社

春日神社は、三笠山の麓に鎮坐したまふ官幣大社なり。こゝに詣で
んには興福寺の門前三條通りを東に進み、爪先上りの坂を上れば、
大鳥居あり。これを入れば右は淺茅原公園にして、南方につゞきて、
晴嵐堂水明榭、待月庵など唱ふる小亭處々に設けあり。左方に若宮
の御旅所とて壇を築きたるあり。素より建物はなし。御祭禮の時若
宮の神輿の渡御せらるゝ處なり。夫よりやゝ南すれば雪消の澤あり。

古へよりの名所なり。飛火野といふはこの邊なりとぞ。又左方に西洋館の見ゆるは奈良帝國博物館にして、その東に鳳翼のごとき日本建築の大夏あるは、物品陳列所なり。二の鳥居の前には車舎屋あり。こゝよりは貴人たりとも下乗すべきが故なり。祓戸神社の前より右に入れば、左方に着到館あり。醍醐天皇延喜十六年の建立にして、春日祭の勅使以下見參を行ふ處なるが、一條天皇以來は行幸の時の行在所に充てらるゝ事となれり。その向ふを右に入れば、白藤瀧あり。休息店ありて客を待つ。以て飲食するに足る。樓門を入りて高きに進めば、即ち春日日本社なり。この本社の前には數多の殿舎あり。幣殿(清和天皇貞觀元年建立)舞殿(同上)直會殿(同上)等是なり。

本社は四座にして、第一殿武甕槌神、第二殿經津主神、第三殿天兒屋神、第四殿比賣大神なり。殿は全體朱塗にして、綠青にてあひしらへり。金の釣燈籠凡そ一千個神前の廻廊に掛け聯ねたり。本社の西方に移殿あり、清和天皇貞觀元年の建立にして、本社御造營中の假殿なり。この殿と本社との間にかゝれる檜廊をねぢり廊といふ。飛驒工の作といへり。これは春日祭の齋女内侍の昇降所なり。その傍に内侍殿といふあるは、即ち齋女内侍の參候所にて、同じく貞觀元年の建立とぞ。又寶庫あり。平城天皇大同二年の創立、慶安三年の改造にて特別建物となれり。その邊りに藤椿南天等七種木の相交り生せるものあり。幾千年經にけんと思はる。又本社瑞籬の内外に小祠數多あり。

本社よりやう南すれば、若宮あり。天兒屋命の御子天押雲命を祭る。崇徳天皇長承四年の創立なり。社の内外に小祠多し。社の前に神樂殿あり、常に白衣赤裳の少女侍坐し。奉納するものあれば、直に樂に合せて舞ふ。之を春日の巫子舞といふ。夫より聊か南すれば、大國社あり。大きなるはしり（即ち東京にていふながし）の上は大黒を祭れり。賽銭箱の大きなるさへその前に据ゑたり。是より山ふかく分けゆけば、大杉あり。回り三十尺長六十二尺アリキのしめ繩をかけたなり。此より又二百二十三間にして、蝙蝠窟に至る。を暗き處にして、常に蝙蝠住むよりの名とぞ。これは往昔春日を切り出し所なりとぞ。上りて七本杉にも至るべし。更に翻りて本社の北三百歩ばかりすれば、水屋社あり。素盞鳥尊稻田姫等の

神を祭る。俗に縁むすびの神といひて、若き男女の參詣するもの多し。社の北に流るゝを水屋川といふ。この下流はよじき川となりて東大寺南大門の前を流れ、遂に佐保川に入る。月日の窟、鶯の瀧なごこの奥に在り。そもく春日社に入りて、先づ目にとまるものは、石燈籠の數多きことなり。いづこよりするも石燈籠を見ざることなく、恰も稻荷社の鳥居の多きがごとし。殊に本社と若宮との道のごときは、燈籠を以て垣を成したりともいふべし。次に目につくは彼の群鹿なるべし。大鳥居を入ると共に、彼の遊べる鹿ごもは人を慕ひて寄り來ること、さなから手飼の犬のその主に於るがごとし、こは神鹿とて、神の使者と稱し、古へよりここに保護を加へあれば、かくしも馴れ睦べるな

り。参詣者は之に餌を與ふるが例のやうになりをれば、社内處々の休息店には、必ずその食物を賣りをれり。故に人の多き處、鹿尤多きなり。維新前はこの鹿を殺さるものは死刑に處せられたりといへば、その鹿の跋扈せしことおもひやらるべし。毎年十一月の初、角伐神事とて、社内荒垣を結び廻らし、山中の鹿を悉く一所に追ひ込め、男鹿の角を切り落す事あり。この時は四方よりの見物人多く鐵道も割引券などを發行するほどにて頗



(四一) (大和國)

る盛況なり。かくの如く春日社には鹿の因縁深ければ、社の内外の小賣店には、鹿角の細工物又は鹿の形を造り成せるもの多し。これ奈良人形と共に、當地の名産の一となれり。次に目に映するは、全山の老杉老藤及び老榊等なり。山ふかく入るほどに愈々これらの樹木多く、天平以前のものと思はるゝも少からず。これ本社の神々しき所以の一つに數へらるべし。按に奈良朝の初、朝廷最も常陸の鹿島神宮を崇敬せられしが、皇都より道遠きまゝに和銅二年に勅してこの春日郷三笠山に分祀せられしが、この社の始なり。次で神護景雲二年に至り、更に下總の香取神宮をこゝに分祀せられ、同時に河内の枚岡神及び比咩神を遷し祀られ、中臣殖粟連の女を以て物忌として祠に侍せしめらる。

(五一) (大和國)

爾來中臣藤原二氏をして之に供奉せしめ、遂に四座を併せて氏神
と爲し、藤原氏四所明神と稱せり。文徳天皇即位の初、使を本社に
遣はして、鹿島の神及香取の神に正一位を授け、又天兒屋命に
從一位比賣神に正四位上を授けられ、清和天皇貞觀元年二月十一
日上申日に祭を行はれしが、恒例となれり。又この時には中宮東
宮より使を發せられ、藤原氏の關白たる者神馬を奉するを永式と
せられぬ。かくて一條天皇永祚元年には車駕の行幸さへ行はるゝ
に至りぬ。
是より先藤原氏一族は、殊に本社を崇敬せしかば、延曆遷都以後、
大原野吉田二社を京都におこし春日社を分祀し本社と通して、之
を氏の三社と稱し、以て朝廷の三社に擬し、又伊勢の齋宮、賀茂の

齋院に準じて、此の社に齋女を置き藤原氏の女を以て之に充て、
封戸祭料の夥しきこと、殆ど伊勢神宮に次がり。かくれば、中世
以降關白の春日詣の時は、朝廷の公卿大方附從し、その儀衛の盛
なることまた行幸のごとくなりぬ。
興福寺の僧徒の跋扈するや、屢々本社の神威を假りて朝廷に抗し、
一たび意のごとくならざる時は、神木を奉じて入京し、宮闕を犯
し強訴するに至れり。戰記文等に神輿を振るといへるは即ち此の
事にして、その僭慢無禮なる延曆寺の僧徒と相比せり。

三笠山

三笠山は春日山の一名なり。山形笠をふせたるが如くなる故に呼ぶ

といへり。この山に三峯あり。本宮峯(又の名浮雲)水屋峯(又の名
羽買)高峯(又の名香山)といふ。共に松杉鬱蒼として千代の緑を添
へたり。

萬葉 大君の御笠の山を帯にせる

拾遺 名のみして山はみかさもなかりけり

阿倍仲磨の三笠山のうたは人の浴く知るところなり。

若草山

三笠山の北につぶきたる山なり。これは全體芝生にして、僅に松樹の

二三生ひ立るのみ。之を古く鷲の山ともいひしは、峯上の鷲陵又東
に鷲瀧あるが故とぞ。この山の上に掛茶屋あり、これ登山する人の
多きが故なり。實や此に登りて見れば、奈良全市は眼下に在り、又
遠く葛城金剛二上生駒等の諸山を望み、秋篠法隆寺郡山あたりも點
點として數へらるべし。鷲陵の傍に至れば山城及び伊賀等の諸嶺を
も望み得べし。されば春秋の氣候よき時は、毎日登山するもの絶え
ず、さらぬ時にも猶登り遊ぶものあり。奈良に旅せんものは、必ず
この風光を賞すべきなり。この山麓をおこなべて武藏野といふ。

氷室・神祠

春日大鳥居より西北の方に在り。仁徳天皇、大中彦命鬪雉稻置を

祭れりと云ふ。氷室の事、仁徳天皇の時に、この鬮稚稻置が命を経て初めて献せしよし史に見えればかく祭れるなるべし。氷室の舊趾は、上述の月日の窟なりといふ。

奈良博物館

博物館は大鳥居の北方にありて帝室に屬せり。明治廿五年工事を起し、凡そ二年半にして落成せしむ。本館は東西二十間餘、南北三十間餘、中央館は幅五丈長さ



(國和犬) (〇二)

七丈八尺天井の高さ三丈二尺といふ。この館には歴史、美術、美術工藝の三部に區別して物品を陳列せり。その品は國寶あり、館品あり、社寺寄託品あり、官衙及び個人の出品あり。孰れも我が古代の文化を徴するものにして、希臘羅馬の古物に比して恥かしからぬもの多し。今その重なるもの一斑を左に記さん。

聖徳太子御筆法華義疏

これは元法隆寺の傳來品なりしを宮内省に献せしものと云ふ。

聖武天皇宸翰須眞天子經

同 西大寺額

同 海龍王經

嵯峨天皇宸翰般若寺額

四卷

三卷

壹面

四卷

木版彫刻

銅經筒 鍍金

藤原道長手寫の經卷を納れしものにてその旨銘刻せり。

狩場明神像 寺傳空海筆

藥師十二神將像 寺傳源信筆

吉祥天像 筆者未詳

僧勒操像 寺傳空海筆

志貴山緣起 寺傳僧覺猷筆

金剛力士立像密迹力士立像

四天王立像乾漆 寺傳定朝作

觀世音菩薩立像 寺傳百濟人作

如意輪觀音立像 寺傳稽文首作

壹箇

龍光院出陳

櫻池院出陳

藥師寺出陳

普門院出陳

興福寺出陳

同

同

法隆寺出陳

岡寺出陳

額裝壹面

屏風

額裝壹面

三卷

二驅

四驅

壹軀

壹軀

天女浮模樣磚 寺傳岡本宮腰瓦

蓮花水鳥圖 寺傳巨勢金岡筆

龍燈鬼立像 康辨作

入口に陳列品目錄を賣捌きをれば、

肝要なり。

一枚

屏風

一軀

夫を求め一々引あてゝ見ることに

同 法隆寺出陳

同 興福寺出陳

新藥師寺

春日社を南方へ入ること數町すれば添上第二御料地なり。是より猶南すれば古寺の築地のくづれたる跡多し。猶ゆけば不空院觀世音本堂の前に出づ、今はその跡のみにて、再建の額古門に掲げたり。この前をすこし歩めば即ち新藥師寺に至る。これは聖武天皇の御建立と

も光明皇后の御建立ごもいへり。早く衰へたりしかば大に修覆を加へし跡あり。本堂の前に石燈籠あり、向つて左に地藏堂あり、中に石像あり。又その邊りに石の五重塔あり。何となくさびれて人足も遠きやうなり。

鏡神社

鏡神社は高畑村の社にして、新薬師寺南門の右にあり。こは藤原廣嗣を祭れりと云ふ。小さな祠にして瑞籬の内に楓櫻の樹あり。拜殿はやく荒れたり。

按に廣嗣は太宰少貳にして、當時僧玄昉及び吉備大臣等を惡逆の臣となし之を誅せずば國家危き由を奏して遂に彼の地にて兵を擧

げし人なり。官軍の追討するに及んでいかで錦旗に抗すべきこと忽ち自ら滅びたり。その時彼の靈崇を爲すといふ流言ありて肥前に社を立て鏡明神といひけり。こゝなるは即ちその靈を分ち祀れるものなるべし。

白毫寺

白毫寺は高圓山の麓、白毫村より一町ばかり上れる處に在り。この寺は天智天皇の御願寺なりしも、今はいたく衰へて、石段芝草に没し、本堂傾き軒朽ちて、本尊もおはさぬなるべし。二重塔の古式なるがあれども、雨漏り壁落ちて葛蔓はひかゝれり。境内惣て雜草生ひ茂り、その地藏堂のごときは、殆ど倒れんとせり。素より番僧もなく詣

づるものもなし。此より見おるせば、奈良市は眼中のものたり。

高圓山

高圓山は白毫寺の上、即ち春日山の南に並びたる山なり。昔より文
人にもてはやされてその名たかし。春がすみたなびくかたの夕月夜

撰後 敷しまや高圓山の秋風に
清くてるらん高圓の山

雲なきみねをいづる月かげ

赤人
後鳥羽院

元興寺

元興寺は奈良飛鳥寺ともいひて、古は大伽藍の一なりしが、早くお
ころへて、今はその境内大方町家に變じ僅に小堂を殘せるのみ。今
十輪院といふもその子院の一なりしなり。日本紀に靈龜二年始移元
興寺於左京六條四坊と在り。これもとは法興寺ともいひし寺にて、
聖徳太子の建立なり。(高市郡に遺趾あり)あはれ、その頃はいかに
大なる建物なりけん。名所圖會に、この寺の塔に昔鬼すみけるよし
記せるをおもへば、衰へたりしも古きよりの事にや。

大安寺舊趾

大安寺は天平の頃は、水田三百町全封一百戸を寄せられし大寺にし
て、東大寺西大寺と相並びて、南大寺とさへ呼ばれたりしなり。(も

とは大官大寺として高市郡に在り。然るをこれも早く廢れて礎のみ残りしを、近代小堂を建て、その趾を存せり。(大和志には護摩堂及地藏堂八幡神社僅存とあれば、その頃まではさばかりの物はありしなり。)萬葉集に、「相おもはぬ人をおもふは大寺の餓鬼のしりへにぬかづくがごとし」とよみし歌あるは此寺なり。菅公の筆なりといふ大安寺縁起は、今世に存してその摺本好古家の愛翫するものたり。

帶解地藏

帶解地藏は帶解停車場より二町、今市に在り。この地藏尊は文徳天皇々后染殿後の御安産の特効ありしとて、伽藍をおこしまつられたり。爾來安産の地藏とて遠近の人々參詣絶えず。

櫟本町

櫟本町は戸數五百餘、停車場あり、警察分署あり、是より五町計の處に榎神社あり。在原寺(本堂及び業平堂あり。又一本薄、夫婦竹、筒井などあり。)柿本寺(即ち歌家)など、この近傍に在り。

正曆寺

菩提山正曆寺は五ヶ谷村北椿尾に在り。本尊薬師佛、兼俊僧正正曆年中勅を受けて草創せりといふ。その後建保の頃信圓大僧正再興す、之を中興開山と稱す。寛永年中火災にかゝりしも、本尊は焼け

す、直に再建したりとぞ。もとは寺中四十二坊ありきといふ。

虚空藏

虚空藏寺は南椿尾に在り。弘法大師の作といふ。奥院に石佛不動あり。

清澄池

清澄池は水の底清くすめるよりの名なり。高樋に在り。虚空藏のほとりなり。この邊古へ清澄莊といへり。

興福寺

興福寺は奈良七大寺の一にして法相宗なり。これはもと山城國宇治郡山階に在りて山階寺と稱し藤原鎌足の建てしものなり。然るを天武天皇の朝に當國高市郡麻坂に移されしかば、麻坂寺ともいひたり。奈良の都成るに及び、藤原不比等春日の地に遷し立て興福寺と名づけたり。後春日の神宮寺として春日寺ともいひ藤原氏の氏寺たり。かくれば東金堂、西金堂、中金堂、南圓堂、北圓堂、大講堂、五重塔、南大門、大峯門等、伽藍雲を凌いで、人をしてその壯大に驚かしめしめ、度々の火災に大方滅びて、今は僅に五重塔南北圓堂等に當時の盛況を想像するのみとなれり。先づ春日社の前通り猿澤池に向ひたる處に一の石壇あり。之を上れば土壇あり。これ南大門の趾なり。それより右方に五重塔あり。天平時代の建築滅びて、今なる

は應永廿六年の建築なり。高さ十五丈一尺といふ。

この北方に東金堂あり。今のは應永廿二年の建築なり。この前に花の松といふあり。元禄年中よりの物とぞ、枝地に垂れて、大花輪のごとし。夫より北すれば金堂あり。これは文政二年の假建築にして、古の中金堂の跡はその前に礎のみ残り。是より西方に北圓堂あり。永承三年の建築とぞ。その南に西金堂の跡あり。自然石の碑を立て、西金堂跡と記しあり。



(二三) (大和國)

その南に南圓堂あり。今なるは、寛政元年の建築なり。こゝには三面八臂不空羅觀音をまつる。參詣人常に絶えず。これ西國三十三所第九番の札所なるが故なり。その西に三重塔あり。康治二年の建築といふ。

此の寺は古へはその敷地も殊に廣く四町四方を有し、今の縣廳師範學校裁判所等もこの構内なりき。然るに前述のごとく、今はその建物一つも當時の物存せず、惜しむべきなり。名高き奈良の都の八重櫻もこの境内にありきとぞ。

前記中南圓堂は藤原冬嗣が、その家族の榮耀を禱らんが爲に建立せしものなり。その時の歌に「補陀洛の南の岸に堂たて今そさかねん北の藤波」といふあり。これは春日の神詠なりと云ひ傳ふ。後藤原氏

の跋扈漸く甚しく食封殆ど全國に滿つるに至り、後三條天皇大に之の弊を矯めんとしたまひしに、折しも關白賴通奢侈を極め、この堂の爲に大に費す所あらんとせしを、天皇ゆるしたまはざりしかば、賴通憤怒して藤氏の榮は今日に盡きたり我が同族は朝廷を退出すべしと躍り上りしかば、天皇止むを得ずその請を容れられしことあり。以ていかに彼の一族の專横なりしかを知るべし。
按に興福寺の藤原氏と共に榮はしことは、今更に言ふまでもなけれども、藤氏が彼の春日を氏神に、この寺を氏寺として、あらゆる奢侈を極めしこといかにばかりなりけん。その金堂の大法會など想像に餘りあり。伎樂なども常に行はれしさまは當時の史書に見たり。さて此の寺務は一乘院大乘院等にて扱ひ、其餘院家と稱し

て、喜多院、修南院、松林院、東北院等凡そ八十餘宇ありき。唯寶藏院といふは世々鎗術を傳へしを以て、その名四方に馳せたり。又勸修坊は文治年中に源義經の潜居せしところ、その他四恩院、悲田院、施樂院、遍照院等あり。又在家の僧を衆徒と稱し三十餘家民間に雜居せり。その小祠小坊實に枚擧すべからず。寺務以下大中葉以降は、全く一の城廓を爲し、朝命といへども寺務に利あらざれば、抗するを憚らず、甚しきは氏神春日の神輿を奉じて入京し、朝廷に傲訴するに至る。そのいかに專横なりしかは、盛衰記以下の戦記文を見ればおのづから了解すべし。

猿澤の池

興福寺南門の前に乃字形をなせるを猿澤の池といふ。天竺の彌猴池をうつしたるが故の名とぞ。これは奈良の朝廷の御時采女某御側近く仕へしに寵おとろへて召さざる事となりしかば、深く恨みてこの池に身を投げて死にけりとぞ。大和物語大意されば今に池の西北に采女祠とてこれを祀り、又東方池水に臨める處に衣掛柳といふありて采女が入水の時衣をかけしものといひ傳へぬ。この池は屢修理せしものと見えて、四方の石垣のさまなどいと新らじ。周圍凡三百八十六間、柳を植ゑ成して小公園となせり。池中には龜鯉などあまた浮びて客の餌を投ずるを待つものゝ如し。

わきも子がねくれたれ髪を猿澤の

池の玉藻と見るぞ悲しき

人

鷹

池の南方には枕流亭以下の諸旅館あり。東方には寫眞屋及び割烹店等あり。以て逍遙すべく、以て休息すべし

十三鐘

十三鐘とは俗稱にして菩提院、奈良大佛堂といふ。猿澤の池の東方、春日大鳥居前に在り。これは僧玄昉の創立にして、今のは應永十七年の改造の物と云ふ。十三鐘といふは、昔興福寺の僧徒春日神社に勤行に上る時刻を報ずるために、朝の七つ時と六つ時の間にこの鐘を撞きしよりの名とぞ。鹿を殺したる小兒を此にて石子詰にせしといふは俗説なるべし。此の鐘今は南圓堂に移されたり。

東大寺

東大寺は春日神社の北隣にあり。一名大華嚴寺、又の名城大寺、又物國分寺又金光明四天王護國之寺ともいふ。八宗兼學にして、三論華嚴を以て本とす。聖武天皇の御願寺にして、奈良第一の大寺なり。本尊は盧舍那佛、いはゆる大佛なり。大佛師國中公麻呂の鑄作にして三年間八度改鑄して成功せるものと云ふ。時に天平勝寶元年十月にして、同四年四月天皇行幸開眼供養あり。大佛殿の高さ十五丈六尺、東西二十九丈、南北十七丈、基砌の高さ七尺、東西三十二丈七尺、南北二十丈六尺、内陣柱九十六本、天坪三千百二十蓋、廻廊柱五百八十本、東西八十五間、南北百間。

大佛身の長、五丈三尺五寸、面長さ一丈六尺、廣さ九尺五寸、眉長さ五尺四寸五分、目長さ三尺九寸、鼻前徑二尺九寸四分、口長さ三尺七寸、耳長さ八尺五寸、肩長さ二丈八尺七寸、胸腹長さ各一丈八尺、臂長さ一丈九尺、肘より腕まで一丈五寸、左手大指四尺八寸、中指五尺八寸、螺髮九百六十六各高さ一尺徑六寸。右鑄具用熟銅七千三萬九千五百六十斤白錫一萬二千六百三十八斤鍊金一萬四百三十六兩銅五萬八千六百二十兩、炭一萬六千三百五十六石

此時浴く黄金を求めさせたまひしに、我國にて、未だその出づべき處なかりしに、天平二十一年二月奥州に金山を發見して之を獻したり、天皇大に喜びたまひ、即ちこの金をもて鑄佛の料に充て

させられ、又年號をも天平感實と改めらる。(感後に勝と改む)萬葉集に大伴家持がこの時の事を詠せし長歌あり。是の如くして大佛は成就せしに、夫より百七年を経て齋衡五年に大佛の頭おのづから落ちたり。これ第一の變なり。その後文治四年平重衡の爲に本殿兵火にかゝり、大佛の頭鎔きなかれたり。依て俊乗坊重源といふ者。再建の願をおこし後白河法皇及び源頼朝の援助により建久八年に落成せしめたり。此時行幸あり、頼朝も參詣して米一萬石、黄金一萬兩、絹一千疋を寄進せり。これ第二變なり。然るに元祿十年本國信貴城主松永久秀の亂によりて、又兵火にかゝり、再も大佛の頭も焼け落ちたり。その後久しく殿堂なくてありしに東大寺の沙門公慶といふもの重修を企て、寶永

五年に今のごとくに落成せり。これ第三變なり。かゝれば大佛の體は天平時代の物なれども、その頭部は元祿以後の物なり。殿堂のごときは、一度ごとに漸く減少せり。今度又新に殿堂重修の計畫あり。されば遠からずして前代に優れる大建物を見るに至るべきなり。大佛の脇は左觀世音、右虚空藏、增長天、廣目天、多門天、持國天あり。殿の前に金銅燈爐あり。方八角にして、四面には佛像、四面には獸形を彫り、銅柱に銘あり。寺傳には宋陳和卿の作といへり。南大門は殿の正面南方に在り。高さ十三間半、表には有名なる仁王像あり。これは東方は湛慶、西方は運慶の作なり。裏の左右に又石造狛犬あり。これまた天下の名品なり。

戒壇院 天平勝寶七年の造立、唐僧鑑真初て羯磨の法を行ひ、賢璟之を受けし處にして本邦登壇受戒の始なり。

真言院 承和三年に弘法大師の建てし灌頂道場なり。

東南院 聖寶僧正の建立にして即ち本坊なり。

鐘樓 天平四年の鑄造なり。鐘の高さ一丈三尺六寸、口の徑九尺一寸三分、厚さ八寸、用熟銅五萬二千六百八十斤、白錫二千三百斤。奈良の諺に云、勢は東大寺、形は平等院、聲は園城寺。

俊乘堂 彼の大佛殿再建の人なり。姓は紀氏瀧口左馬允季重の三男、出家して宋に渡り深く佛道を極めて歸朝し黒谷源空上人の弟子たりし人なり。又この傍に行基堂、及び地藏堂あり。

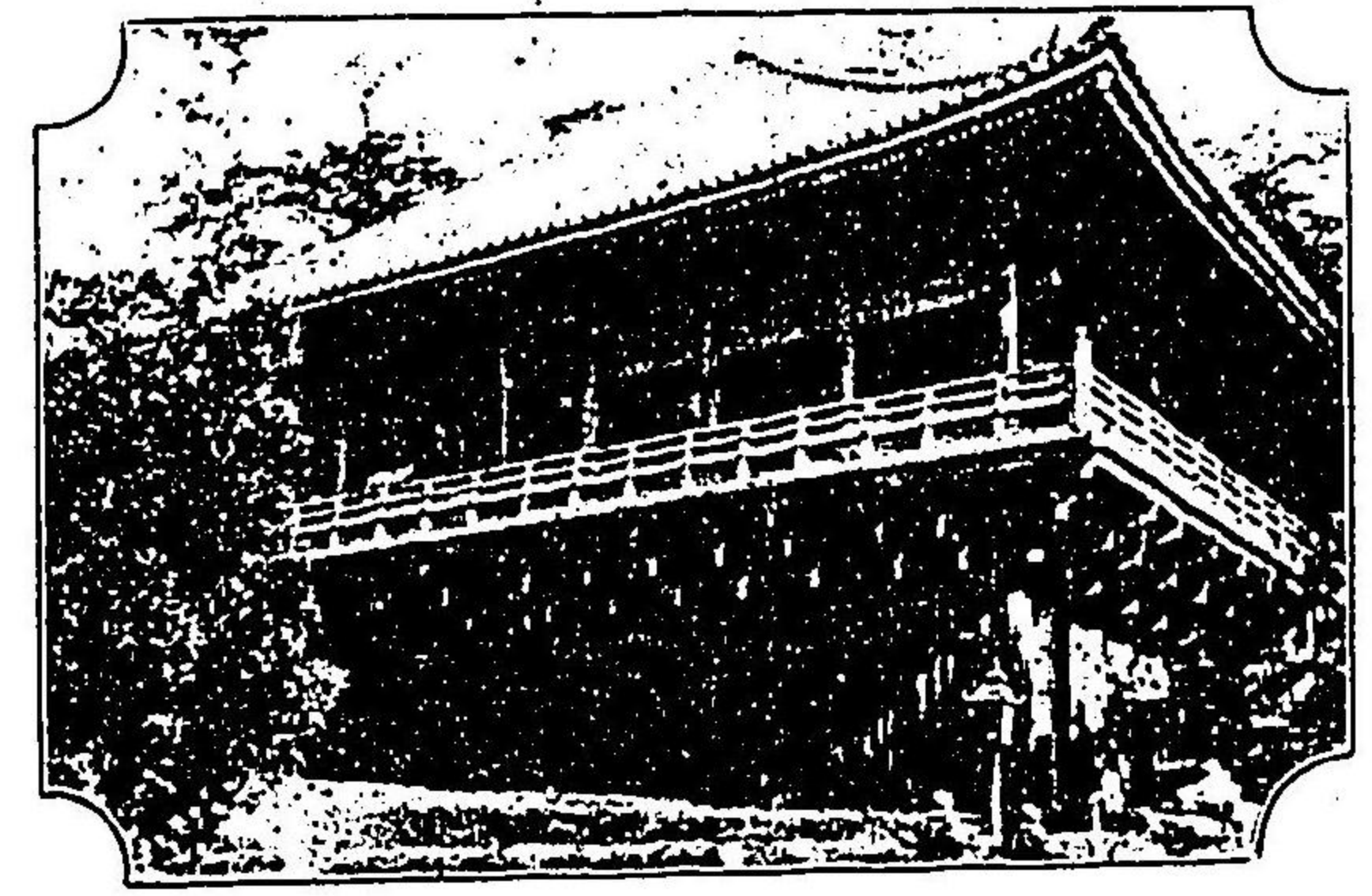
三月堂 法華堂また金鐘寺ともいふ。良辨僧正の開基なり。本尊

は不空羅索觀音にして良辨の作とぞ。その東に不動西に地藏あり光明皇后の御作と云ふ。

四月堂 三昧堂といふ。本尊は普賢菩薩又十一面觀音、不動尊、毘沙門天を安す。

二月堂 羅索院といふ。良辨の弟子實忠の開基なり。本尊は十一面觀音又小觀音あり。これは常にその身暖なりとて肉身の像ともいふ。

若狹井 二月堂の閼伽水なり。開基の



當時若狹の遠敷の神、こゝに歸依して献られしものといひ傳へたり。
開山堂 良辨僧正及び實忠和尚の座像あり。
浴室 こゝには二十八石入りの大釜あり。
講堂趾 大佛殿の後にあり。永祿の回祿にかゝりて、今は礎のみの
これり。

西大門趾 これは雲井坂に在りしかば、雲井坂門ともいひき。今は
その礎のみ遺れり。
轉害門 大門とも景清門ともいふ。天平年中の物、その儘のこれり。
景清此にて源頼朝を狙ひしといふは取るに足らぬ説なり。これは西
面にしてこの門前は即ち京都街道なり。こゝを買きて西方に直行すれ
ば、即ち古への大内裏の趾に達す。いはゆる一條通りなり。

正倉院寶庫

正倉院は今帝室に屬しをれども、古へは猶東大寺の一寶庫たりき。
これを校倉といひ、又三倉ともいふ。建築は材木を組合せて造り上
げたるものにして、すこしも土を用ひず。この庫には孝謙天皇御父
聖武天皇の御調度類を納めて大佛に供せられたるものにして、爾來
今に至るまで千百餘年、嚴重に勅封せられて、その筋の許可を得ざ
れば拜觀する事を得ず。納めたまひしものは、服飾、器具、古文書
等數百點にして孰れも當代の美術の精巧を證するものなり。この御
物の模造品は當地博物館及び東京上野の博物館に陳列せられたるあ
り。常に巡查之を守護し、毎年秋季には宮内省の吏員出張して曝涼

すゝしる。

手向山八幡宮

手向山は若草山の北方に在り。八幡宮は東大寺の鎮守にして、天平勝寶元年に豊前の宇佐八幡宮を勧請したるものなり。菅公の「この度はぬさもとりあへず手向山紅葉のにしき神のまに〜」と詠まれしはこの處なり。今もこの邊、晩秋に至れば紅葉錦のごとし。

佐保川

佐保川は春日山鶯の瀧より流れ出で、奈良市の北方に添ひ、大佛停車場の傍にて吉城川と合同し、西して遂に本の添下郡に入る。これ

は古は今の東京の墨田川、京都の加茂川(大小の差はあれども)といふごとく、常に都人士に玩ばれし故に、その名たかし。但し今は流れも狭められて、千鳥なきけんむかしの影の思ひくまるゝのみ。東大寺轉害門の前を北行して奈良坂に向ひゆけば、小石橋ありて、この川に架せられたり。

大伴郎女

萬葉 千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波

忠

岑

古今 千鳥鳴く佐保の川霧立ぬらし
山の木葉も色まさりゆく

般若寺

般若寺は奈良市の北方般若坂（即ち奈良坂）に在り。聖武天皇の建立なり。門を入りて向ふに見ゆる石の十三塔は即ち同天皇勅書の大般若經を納めし處なり。般若寺の稱は實に之より起れり。この十三塔の周圍に廿五菩薩の石像あり。別に本堂觀音堂等あり。當寺は元亨の亂の時、彼の護良親王の難を避けたまひし處にして、その時御身を潛ませたまひきといふ唐櫃はこゝの什寶となりて、今は奈良博物館に陳列せられ



（國和大）——（八四）

たり。藤原頼長の墓は般若寺村に在るよし、大和志に記せれど、今は詳ならず。頼長は保元の亂に流矢に中り、奈良坂まで遁れ來しが、遂に此にて死せしことなれば、墓もこの邊にありしなるべし。京都聖護院の南に左府墳とて、この人の墓といふあるは蓋し供養の墓なるべし。

聖武天皇御陵

聖武天皇の御陵は、佐保山南陵と稱す。佐保村大字法蓮に在り。兆域周圍三百三十三間餘。大佛停車場の附近なり。

仁正皇后御陵

仁正皇后とは、即ち光明皇后の御事にて、仁正とは諡なり。御陵は聖武天皇と相並びてや東に在り。佐保山東陵と稱す。

元明天皇御陵

元明天皇の御陵は、奈保山東陵と稱す、奈良町大字奈良坂村に在り。兆域周圍二百三十二間餘、元正天皇の御陵も同じく相並びて西に在り。奈保山西陵と稱す。兆域周圍二百六十五間餘。

開化天皇御陵

開化天皇の御陵は春日率川坂上陵と稱す、奈良市油坂地方町に在り。兆域周圍三百間二尺餘。奈良鐵道停車場の東左方にあたる。

率川坐大神御子神社

率川は奈良市の中央を流るゝ小川なり。その邊に率川坐大神御子神社あり。又春日三枝神社ともいふ。姫籠踏五十鈴姫命及び大國魂玉櫛姫三神を祀る。推古天皇の朝に始て祠を立てきといふ。子守町にあるが故に土人は子守社と呼ぶとぞ。

不退寺

不退寺は佐保村法蓮にあり。もと平城天皇の御所なりしを、天皇崩後御子阿保親王住みたまひしが、後その子在原業平請ひて寺とせられしものなり。

法華寺

法華寺は法華寺村にあり。淡海公不比等の宅地たりしを、光明皇后(即淡海公の女)寺となされしとぞ。律宗にして一名國分尼寺といふ。公卿の女を住職とす。寺内に横笛堂あり。彼の建禮門院の雜司横笛といふ女の住みし處といふ。

海龍王寺

海龍王寺とは、法華寺の東北に在りて、同じく律宗なり。天平三年光明皇后の建立といふ。一に隅寺と名づく。弘法大師暫く此に住みしとぞ。

月ヶ瀬

梅花の月ヶ瀬に於るは、恰も櫻花の芳野に於るがごとく、海内誰人か、その名を知らざるものあらん。月ヶ瀬は名張川の溪間にありて、奈良市を去ること、三里有餘なり。伊賀上野停車場よりは二里餘の道なり。梅は月ヶ瀬村のみにあらず、廣瀬、嵩、遲瀬、治田、白檜、石打、尾山及び長引の諸村にわたり、この村を買きて、いはゆる名張川は淵となり瀬となりて流れゆく。梅花の頃は、遊客多きまゝに、茶舗所々に構へ成されて、よりくる人々を休息せしむ。舟を浮べて見るもよろしく、溪谷を跋渉して香雲に入るも興あり。但し芳野、嵐山のごとく旅館のいかめしきものはあらず、さはれ鶯の宿を尋ね

て、花下に丸寝せんもまた風流なるべし。
この地、彼の齋藤拙堂の遊記によりて、最も世にその名を知られた
り。頼山陽の萬樹梅園ニ溪水ニ長、芳山寧敢擅ニ春芳ニ東風一様晴雲白、
孰ニ與此中雲有ニ香といふ詩あり。

生駒郡

平城宮跡

平城宮の跡は上條奈良市歴史談の下にいひしがごとし。即ち法華寺
の西都跡村に在り。土人大黒芝といふ。大黒は大極の字音にて大極殿
の在りし地たるを證するに足る。今は石標を建ててその舊跡を示せ

り。この正南當時の朱雀大路の果、今の郡山の東關西鐵道線の東
佐保川の岸近き處に古の羅城門跡あり。圖會に田を耕す時礎石を得
たり、羅城門の銘あり云々。この字をらいせといふとあり。

磐之姫御陵

磐之姫命の御陵は、都跡村の大字佐紀に在り。命は仁徳天皇の皇后
なり。

平城天皇御陵

平城天皇の御陵は、楊梅陵と稱す都跡村大字佐紀平城宮跡の西に在
り。兆域周圍百九十八間餘。

孝謙天皇御陵

孝謙天皇の御陵は、高野陵と稱す。平城村大字山陵に在り。兆域周圍二百五十三間餘平城宮趾の西平城帝陵と東西相並べり。

成務天皇御陵

成務天皇の御陵は狹城盾列池後陵と稱す。平城村大字山陵に在り。兆域周圍四百一間餘。

神功皇后御陵

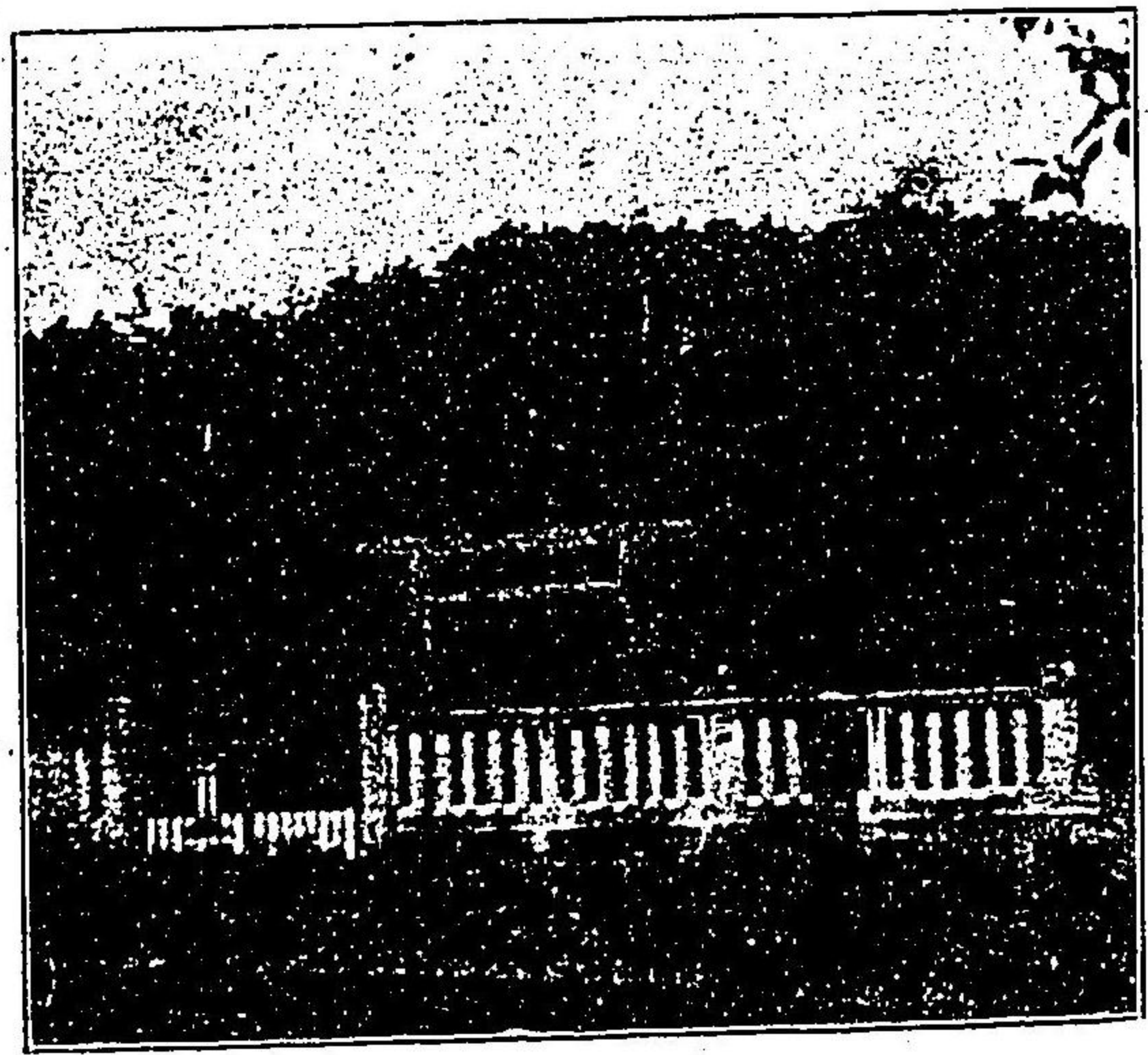
神功皇后の御陵は狹城盾列池上陵と稱す。同所に在り。兆域周圍五百八十四間餘。この陵の前に鎮守八幡宮あり。

水上池

水上池は常福寺にあり。即ち古の狹城盾列池なり。廣さ千二百餘畝、垂仁帝の時に築かれしものなり。但し今は古のごとくに大ならず。

秋篠寺

秋篠寺は即ち秋篠に在り。神



功皇后の御陵と秋篠川及び田畝を隔て遙に相對せり。これは光仁天皇の御創立にして桓武天皇の時に至り落成せり。開山は善珠僧正、本尊は薬師にして行基の作十二神將は春日の作といへり。この寺に有名なる香水小祠あり。濫に人の入ることをゆるさず。玉葉朝日さす生駒のたけはあらはれて

霧立のぼる秋この里

前參議實俊

西大寺

西大寺は南都七大寺の一にして、平城宮趾の西にあるに由つて名づく。孝謙天皇の勅願寺なり。この天皇を高野天皇とも申上しかば、この寺を高野寺ともいふ。三論宗にして開山は釋常騰なり。この

寺貞觀二年に火災にかゝり、その後嘉祥年中に又火災にかゝりしを、興正菩薩中興開基せりといふ。古は寺坊十五宇ありて頗る盛なりしを、今はやうく衰へたり。本堂釋迦、觀音堂、本尊は丈六の立像にして鳥羽院の御願にかゝり、堂内の四天王は奈良時代の物といへり。奥院に興正菩薩の塚あり。多寶塔は今礎のみ残り。

菅原神社 菅原寺

この邊を菅原伏見の里といふ。野見宿禰の裔孫の土師の一族の住みし地なり。菅原、秋篠共に之より出でたる氏にて菅公祖先の地なり。この菅原神社は、菅原氏の祖神を祭り、後菅公を合せ祀りききぞ。菅原寺即ち喜光寺なり。行基菩薩の建立といへり。菩薩は天平二十

一年この寺にて寂滅せりと云ふ。この寺今はいたく荒廢して、田畝の中にたゞ一堂(しかも傾きたる)を存せるのみ。(余が詣でし時には神社は菅公千年祭の影響にて修覆中なりしが、寺の方には誰も詣づる人もなかりき。均しく菅原氏の祖先に縁故あるものなれば、これをも保存したきものなり。寺とて嫌ひはあるべからず、殊に菅公は佛を信せられしをや。)

古今 いざこゝに我世は經なん菅原や

讀人不知

千載 何となく物ぞ悲しき菅原や

俊頼

伏見の里の秋の夕ぐれ

かゝれば西京すたれしより、早くもこの邊は荒れきと見えたり。

安康天皇御陵

安康天皇の御陵は菅原伏見西陵と稱す、伏見村大字寶來に在り。兆域周圍百八十二間餘。

垂仁天皇御陵

垂仁天皇の御陵は菅原伏見東陵と稱す。都跡村大字尼ヶ辻に在り。寶來山陵と稱す。大凡本國の山陵は前方後圓の古制を存するものたりといへども、この御陵のごときは最も鮮明に伺ひ奉ることを得、參詣者はことに心をこむべし。兆域周圍五百五十八間餘。

唐招提寺

唐招提寺は寶來より南方五條にあり。聖武天皇の御願にして、唐僧鑑真大僧正の開基なり。律宗にして、西大寺おとろへて後は、この寺七大寺の一に數へられたり。金堂講堂食堂以下の堂塔、當代の物を存せるもの多し。ことに講堂は奈良朝廷の大極殿前の諸堂の一なる朝集堂を寄附せられしものなり。建築の風のやゝ異なるはさる事にて、屋上の瓦の兩端なる今の鯨を擧ぐべき處に鷓尾を附したるは、平城宮の當代を忍び奉るに餘あり。能く注意すべし。その東方の長廊は北方を舍利殿といひ、南方を禮堂といふ。この建築も他寺に類ひ少なし。鑑真和尚は勝寶四年に來朝し大に天皇の信仰を得、

東大寺に住し、始てかここに戒壇院を建てし人なり。この招提寺はもとは新田部親王の宅地たりしを勅に依て、この和尚に賜はりきこいふ。又この寺の中興開山は覺盛和尚とて、鎌倉時代の人なり。

藥師寺

藥師寺は唐招提寺の南方砂村に在り。一名西京寺といふ。土人は單に西の京といふ。法相宗なり。これは天武天皇九年に皇后の御病平癒御祈禱の爲に建立せられしものなり。持統天皇十一年藥師の開眼あり、文武天皇二年伽藍成就す、當時高市郡岡本に在りしを、元正天皇養老二年添下郡右京六條二坊即ち今の地に移されたり。金堂講堂以下諸堂あり。その六層塔は最も名高き建築にて、露盤銅柱の銘は

舎人親王の題書といふ。この寺に佛足石あり。これは本寺創立の際百濟より献せしものとぞ。釋迦の足跡を彫りたる石にして、眞跡、長さ一尺五寸七分、廣さ五寸三分、磐石高さ一尺八寸餘、平面縦二尺五寸、横三尺二寸五分、その後には佛足石を讚する歌十七首を彫刻せり。眞假字にして光明皇后の御作と云ふ。世の好古家摺本として之を珍重す。

孝謙天皇暫くこゝを行在所としたりし事あり。又淳和天皇天長九年以來令して毎年この寺にて最勝王經會を設けさせらるゝ事となり、仁明天皇嘉祥二年以來金堂にて造花會を行はせらるゝ事となれり。

郡山町

郡山町は柳澤氏の舊城下なり。市街縦横に通じ、商估頗る多く戸數二千二百餘奈良市につゞきて繁華の地なり。警察署、銀行、區裁判出張所、中學校等の建物あり。關西鐵道の停車場あり紡績會社あり、木綿を業とするもの多し。

郡山城はもと小田切春次といふもの永祿年中に築きしものにて筒井の麾下に屬せしなり。天正十三年豊臣秀長城を峻くし濶を深くし攝津城の藩屏とせしが、秀長卒し子秀俊嗣ぎしも天死して國除かれ、増田長盛をして守らしめたり。長盛後に紀州に遁れしより、大久保長安こゝに居りしが、その跡よからず、十九年筒井定慶慶之兄弟を

して守らしめしも、難波亂起りて兄弟出奔し、元和以來水野勝政居守し、遂に得替して柳澤氏に至れり。今は廢棄して、その城内に中學校あり。沿革は大和植槻八幡宮は郡山にあり。萬葉集に吾がおもふみこのみことは春されば植槻の上の云々とある地なり。又藥園八幡宮といふは、古の藥園にして孝謙天皇の時藥園新宮にて大嘗會を行ふとある地なり。郡山は古へ平城宮の南端にして、町の三分の一即ち北郡山町は右京の八條九條の間に入りたり。羅城門趾といへるは、即ちこの町の東端より數歩の處にあり。

小泉町

小泉町は郡山の南方なり。天文年中小泉四郎といふ者此に營せしといふ。元和の初片桐貞隆に賜へり爾來片桐氏の治下たりき。今は戸數三百餘あり。庚申堂ありて名だかし。

富の小川

富の小川は班鳩の富の小川といひて古より文苑に入れり。添下郡より流れいで高安に至りて大野川といひ、笠目に至りて廣瀬川に入る。

夫木 いかるかやよるかのかの池は氷れども
公 朝
遺拾 萬代をすめる龜井の水やさは
弁 乳 母

富とみの小川せがはの流れななるらん
金葉きんえつ君きみが代よは富とみのを川がはの水みづすみて
源みなもと 忠たか 季すま

千ちとせをふとも絶たえしとぞ思おもふ

生駒山

生駒山いこまやまは河内かはちとの境さかひに在あり。本郡ほんぐんの大山たいざんなり。東ひがしに小峰こみねあり巖屋山いはや

と呼よぶ。翠みどりふかく、山やまけはし。

新勅ひさかた久方ひさかたの雲井くもゐに見みえし生駒山いこまやま

玉葉たまは生駒山いこまやまあらしも秋あきの色いろにふく
春はるは震かすみのふもととなりけり
定ま 後ご 京きやう 極ごく
手染てぞめの糸いとのよるぞくるこき

家いへ

續後つづきご 雲深くもふかきみ山やまのあらしきえくして
生駒いこまのたけに電あられふるらし

實ま 朝あさ

法隆寺

法隆寺ほくりゆうじは舊平群郡きゆうへいぐんの東南とうなん法隆寺村ほくりゆうじむらに在あり。大和やまとの名刹めいさつにして奈良七なら

大寺だいじの一いちなり。舊名きゆうめい班鳩いはるか寺じ法相宗ほふさうしゆうにして八宗兼學はつしゆうけんがくなり。初め聖徳太はじ

子宮室しきうしつを班鳩いはるか(今の東院とういんの地ち)に興おこされしが、後寺のちてらとなし、遂つひにこの

大伽藍だいがらんを營いとなまるゝに至いたり。金堂講堂こんどうかうどう五重塔ごじゆうたう東院とういん夢殿むのどの西圓堂さいえんどう聖靈せいりやう

院等いんどう凡おおよそ二十七字しちじふしちじ、僧院そういんも維新前いしんぜんまでは六十餘宇よそじゅううに上のぼれりと云いふ。

金堂こんどうは、我が國わがくに古建築こけんちくの第一だいいちに數かずへらるゝものにして、今は内外人いまないくわいじん

士しこの道みちに携たごるものゝ浴あまれし知しる處ところなり。この堂どうは四方正面はうしやうめんにして、

中には釋迦、藥師、阿彌陀、諸尊の像ありて、鳥佛師の作といへり。その藥師佛光背の銘は、我が國最古の金石文として世に珍重せられ、四方の壁畫は天下有數の美術品と稱せらる。凡そ寺中に於て、この堂は歴史美術の點より、最も研究する事多く、今はその専門家の屈強の微證と此材料とするものなり。

夢殿は八角寶形堂なり。上光院又上宮王院ともいふ。聖德太子御作の沈香の觀音を安置す。繪殿は武徳院ともいひて、太子御一代の歴史を圖にして畫けり。巨勢金岡の筆といふ。

聖靈院は俗に太子堂といふ。太子東帯の御像あり。按にこの寺古へは特に朝廷の御信仰あり。太子の時に播磨國の水田を施入せられしを始め、天平十年には食封二百戸を施し、天平

勝寶元年には墾田地一百町を捨し、貞觀二年には東院修葺料として平群郡水田七町四段を施入せられたり。かゝればおのづからその威勢も添ひて頗る隆盛を極めたり。今はやうやく衰へて、美術歴史等の有力なる建物として、保存せらるゝに至れり。かくの如き縁故ある地たかにより、古より庶民來り集りて一村をなし、今は戸數四百餘に達せり。旅館あり、停車場あり、大和名所中屈指の處にして人の往來絶わす。

中宮寺

中宮寺は法隆寺の良の隅に在り。一に班鳩尼寺といふ。(太子御母公の寺なり)。この寺に有名なる天壽國曼陀羅の什物あり。

龍田神社

龍田坐天御柱國御柱神社二座は、法隆寺の西南方に在り。風の神なり。崇神天皇の時肇めて祀らる。天武天皇三年美濃王を遣はし龍田立野に於て之を祭るとある是なり。爾來朝廷屢く使を遣はして風雨の災なからんことを祈らる。延喜の制名神大社に列し、四度官幣及び祈雨祭に預り給へり。社前に龍田町あり。戸數四百五十餘、警察分署あり。奈良より河内に越ゆる道なり。この社の上にあるを龍田山といふ。その麓を流るは龍田川なり。神南山、三室山、磐瀬森など、いづれもこのあたりなり。信貴山も遙に見ゆ。

伊勢物語 風ふけば沖つ白波立田山

業平の妻

夜半にや君が獨こゆらん

元方

後撰 立田川立なば君が名をくしむ

いはせの杜のいはこそぞ思ふ

能因

後拾遺

あらしふく三室の山の紅葉は

立田の川の錦なりけり

讀人不知

古今

神無川時雨もいまだふらなくに

兼てうつろふ神なびのもり

北葛城郡

廣瀨神社

廣瀨坐和加宇加賣命神社は、即ち倉稻魂命なり。又廣瀨大忌の神と稱す水の神なり。龍田社とそとの起源同じ。舊廣瀨郡河合村にあり。中古に風神祭といへるは、龍田の祭にして、大忌祭といへるはこの御社の祭なり。延喜の制、名神大社に列し、四度官幣及び祈雨に預ること龍田社と同じ。

廣瀨川

廣瀨川は初瀨川百濟川葛城川鳥見川の四水合して廣瀨川となる。葛下郡平群郡の界に至つて龍田川となる。大和志

新編 五月雨に汀よりりて廣瀨川

名にこそたてれ水の白浪

頼

阿

達磨寺

達磨寺は王字停車場の近傍に在り。片岡山といふ。推古天皇廿一年聖徳太子この處を通りたまひ、飢人の臥するを見て、飲食衣服を與へ、歌をもよまれしこと史に見ゆ。この飢人死にしかば、太子之は凡人にあらずとて、そこに墓を築かせられしを後人達磨大師となして之を達磨墳といひ又塔をたてて達磨寺と號しけりとぞ。片岡春利の墓、松永久秀の墓等この寺中にあり。按に日本紀にこの時の太子の歌あり云く。しなてるや片岡山に飯

に飢て、こやせるその旅人あはれ、おやなしに、なれなりけめや、
さす竹の君はやなき、飯に飢て、こやせるそのたびとあはれ。又
その死して後数日を経てかの屍骨を見給へば、衣服のみ棺の上に
たぐみて、骸骨はなくなりけり、是に於て太子その衣服を取り、
また常のごとくに服し玉ひければ、時人恠しみて聖の聖を知るこ
とそれ實なるかなとて愈々惶ると見ゆ。拾遺集には、この飢人の
太子に返歌せりとて、いかるかやとみのを川のたえはこそ我大君
の御名をわすれめといふを載せたり。

二上山

二上山は當麻村の西北に在りて河内國に跨れり。二上とは二峯なる

が故なり。男嶽女嶽といふ。恰も常陸の筑波山のごとし。北に小峯
あり銀峰といふ。南に瀑布あり。一丈餘なり。山頂に二上神社あり。
今權現と稱す。
今嶺古 ぬば玉の夜は明ぬらし玉くしげ
家 持

二上山に月かたふきぬ

當麻寺

當麻寺即ち法藏院禪林寺は、二上山の下丸子山の麓にあり。本堂に
觀世音を安す。用明天皇々子鷹古親王の御建立といふ。本は河内山
田村の上方二上山に在りきとぞ。正堂金堂講堂三重塔以下小宇あり。
こゝには中將姫の住せられし處とて彼の逆の曼陀羅寶物となれり。

その紫雲庵といふは、姫の命終の處とぞ。

浮孔宮趾

浮孔宮は安寧天皇の皇居なり。今三倉堂村にその趾といふ處あり。

腰折田

腰折田は良福村にあり。これは垂仁天皇の時に、當麻の蹶速勇力を頼みて、良民を苦しめければ、天皇、野見宿禰を出雲より召して相撲せしめられたり。宿禰力をこめて蹶速の脇骨を蹶ければ、蹶速はやがて死にけり。天皇宿禰が功を賞して蹶速が田を賜はりぬ。これを腰折田といひけり。今にその趾あり。

歌塚

歌塚は柿本村影現寺の中にあり。塚の傍に天和元年に建てし林某の碑文あり。人麿冢なるよし記せり。按に和銅元年柿本朝臣佐留といふ人死せしことあり。柿本といふより人麿に附會し遂に歌塚をも起てしものか。添上郡標本にも同じく歌塚ありて人麿と唱へ居れり。人麿は石見にて死せしなり。

高田町

高田町は南和鐵道の發着地にして、人家稠密戸數八百五十餘あり。町は東西に長く南北に短し。高田川町を貫けり。警察署、區裁判所

等あり。木綿販賣を業とするもの多く、土地おこなべて富有といへり。

飯豊天皇御陵

飯豊天皇の御陵は、埴口丘陵と稱す、新庄村大字北花内に在り。兆域周囲二百二十二間。

顯宗天皇御陵

顯宗天皇の御陵は、傍丘磐坏丘南陵と稱す。下田村大字北今市にあり。兆域周囲百四十四間餘。

武烈天皇御陵

武烈天皇の御陵は、傍丘磐坏北陵と稱す。志都美村大字今泉にあり。

孝靈天皇御陵

孝靈天皇の御陵は、片岡馬坂上陵と號す。王子村大字王寺にあり。兆域周囲百三十六間餘。

南葛城郡

即ち舊忍海郡及比葛上郡なり

角刺宮舊趾

角刺宮とは飯豊天皇の宮なり。今忍海村にその舊趾あり。飯豊天皇
とは、飯豊青皇女と申し奉りて、清寧天皇の崩後、彼の億計弘計の
二皇子の御位譲りの間、位に即きたまひし御方なり。

御所町

御所町は南和鐵道の停車場の在る處なり。戸數千戸に近く、郡役所
及び警察署、區裁判の出張所等あり。市店軒を接し、物貨また少
からず。

葛城山

葛城山は南北葛城兩郡に連なり、嶺の西方は河内に隸ぶ。峯多く谿

深し。第一峯を高天山といふ。高さ三百丈。

人 歴

萬葉青柳のかつらぎ山に立つきりの

貫 之

立ても居ても妹をしぞおもふ
後撰玉かつら葛城山の紅葉は
面かげにのみ見えわたるかな

葛木坐一言主神社

葛木一言主神は、素盞鳥尊の御子といふ説もあり、又大國主神の御
子といふ説もあれど詳ならず。この神の顯はれたまひしは、雄略天皇
の葛城山御狩の時にして、爾來此に祭られしが。今は森脇村にあれ
ども、その古は山上なりきといふ。

按にこの邊葛城氏一族の根據地なり。葛城氏には征韓役に大功ありし襲津彦あり、又履中反正允恭の三朝に事へし圓大臣ありき。

金剛山寺

金剛山寺は、葛城山の頂に在り。一名は高天寺、正堂二字、小祠二字大和に屬し、餘は皆河内に隸す。東北は則朝原寺、東南は則石寺舊名猪石岡といふ。志 大和

按に貝原益軒南遊紀行に云、葛城山は大峯の外畿内にも近國にも是程の高山は見えず、絶頂に葛城の神社あり、大社なり、一言主の神といふ、役行者堂あり、山上より二町西に下れば、河内國金剛山轉法輪寺あり、役小角の開基なり、是山伏の嶺入して修法す

る所なり、僧寺六坊あり、皆家作美大なり、大和河内の農民此神を甚尊崇し、社の下の土を少じばかり取てかへり、我田地に入れば、稻よく實りて出くはずとて、參詣の人夥し皆宿坊ありて宿するもの多し、檀那にあらざれば、宿を借さず、葛城の社は山のいと高き頂上に在て、大和國なり、金剛寺の寺院は西の方の少ひさき所に在て、河内國なり。葛城の本社のすこし西に石不動を立ち、是大和河内の境なり、葛城の北にある大山をかいなが嶽といふ、河内にては是を篠峯と號す、篠峯を葛城山といふはあやまりなり、葛城は金剛山の峯なり、高間山あり云々かいなが嶽は即ち戒那山にて葛城山の中腹なり。水越嶺とはこの間に在りて、大和河内の往來なり、楠正成はこゝより吉野殿へゆきたりと云ふ。

檀原宮趾

檀原宮は人皇第一代神武天皇の皇居なり。舊趾、今白檀村に在り。又綏靖天皇の高丘宮趾は森脇村にあり、孝昭天皇の池心宮は池内御所二村の間に在り。孝安天皇の秋津島宮趾は、室村にあり。以上孰れも我が皇祖の都の地たりといへども、今は田圃村落と變じぬれば、たゞ古書と地名とに依りて、大方この邊と押はかるのみ。いづこよりいづこまでと明には知られざれども、この邊の形勢を見て大方を押しはかり知るべし。

掖上嗛間丘

嗛間丘は、一名望國山とよぶ。掖上停車場より遠からず。これ即ち神武天皇ここに上りたまひて、大和國は内木綿の眞追國といへども蜻蛉の譬帖せるがことごと宜ひし所にて。秋津島の名の由りて起りし地なり。今猶秋津村あり。

孝昭天皇御陵

孝昭天皇の御陵は、掖上博多山上陵と號す。三室村にあり。兆域周圍百五十四間。

孝安天皇御陵

孝安天皇の御陵は、玉手丘上陵と號す。掖上村大字玉手に在り。

兆域周圍三百九十六間餘。

吉祥草寺

吉祥草寺は一に茅原寺といふ。茅原村に在るが故なり。この寺役小角の開基にて行者州二才の像あり。行者は此地にて生れ、葛城山に入りて修行せし人なり。(文武天皇三年に行者は呪術を以て衆を惑はす罪に處せられて伊豆に流されたり。)

日本武尊御陵

日本武尊 琴彈原白鳥 陵は秋津村大字富田にあり。兆域周圍三十間、按に尊の御陵は三ヶ所に在り。白鳥三陵と稱す。(伊勢河内及此地)

こゝは第二の御陵なり。

巨勢山

巨勢山は葛驛の傍大字古勢に在り。高凡そ四十丈、巨勢氏の一族は此地より出でたるべし。孝徳天皇の時の左大臣巨勢徳陀古といひしあり。蘇我氏を滅したる將軍なりき。巨勢山の神社 神名帳にも見えて此に在り。又巨勢寺は今も廢れたれども、猶礎石残れり。蓋し同一族の氏寺なりしなるべし。

坂門 人足

萬葉 巨勢山のつらつらに椿つらくに
見つく思ふな巨勢の春野を

葛 温泉場

葛は南和鐵道の一驛なり。一小村なれども、近年温泉發見のため、旅舎も出來日を逐て賑合ふさまなり。温泉の質はいはゆる礦泉にて皮膚病胃病腦病等に特效ありと云ふ。持主は生花樓とて大阪人なり。故に飲食器具等山間に似ず都びたり。停車場に近く、且吉野登山者は大方此よりする事なれば、春の頃は頗る繁盛す。礦泉の分析表及び効用左のごとし。

成分

- コロールカリウム 〇、〇二六
- コロールカルシウム 一、七九六
- 格魯兒加爾叟謨 〇、〇二六
- 格魯兒那篤留謨 二、五一一
- 重炭酸加爾叟謨 三、二〇二

重炭酸加爾叟謨 〇、九二九
 礬土及酸化鐵 〇、〇五五
 炭酸 一、七九九

硫酸加爾叟謨 僅
 硅酸 〇、二四二

効用
 (内服) 消化不良 腺病及佝僂病 (浴用) 慢性皮膚病 潰瘍
 頭痛癩 子宮病 血の道 リヨウマチス ヒステリー ヒボコン
 デル 截傷一切

宇智郡

五條町

五條は南和鐵道の發着地なり。此より南紀和鐵道に聯絡して紀州に至る。本郡の西部にして、山間の一都會たり。戸數凡そ七百、郡役所、及び警察署區裁判所中學校等あり。市街殷富なり。

榮山寺

榮山寺は小島村に在り。役小角草創の地、元正天皇の御願にて養老三年に藤原武智麿(所謂藤氏南家の祖)の建立なり。金堂以下その儘に遺れり。その八角堂は武智麿の長男藤原豐成の造營にて、これもその儘なり。この寺に古鐘あり、山城深草道澄寺の鐘なり。その序及び銘は小野道風の書にしてこの道の人々の嘆賞するものなり。今墨本として世に行はる。

この寺の前に吉野川の流あり。四時常に浪立たず靜なること油のごとし。俗に呼で音無川と云ふ。土地幽閑にして心神を養ふに適す。

阿陀墓

阿陀の大野といふは、古より文苑に名だかき地なり。その阿陀墓は南阿陀の東大家山に在り。贈太政大臣藤原良繼の墓なり。

後阿陀墓

後阿陀墓は、榮山寺の北方にあり。贈太政大臣正一位藤原武智麿の墓なり、碑面に、當寺本願南家始祖贈太政大臣正一位武智麿尊儀背面に天平九丁丑年七月二十五日薨御と記せり。

井上内親王陵

他戸親王墓

右二つともに南宇智村大字御山と坂合部村大字黒駒大野との界にあり。内親王の陵は御廣家といひ、親王の墓は庶人墓といふよこ大和志に見ゆ。

按に内親王及皇太子、罪ありて宇智郡役官の宅に幽せられ、薨御の後此の地に葬られしなり。事は續日本紀に詳なり。

地福寺

地福寺は北宇智村久留野に在り。久留野より北山を経て西すれば千

早越に至るなり。

山邊郡

石上布留御魂神社

石上神宮は山邊村大字布留に在り。布都乃靈劍を祀る。官幣大社なり。正殿、拜殿、渡廊、樓門、神庫、祭器庫、攝社、末社、及び神饌所、社務所あり。丹波市停車場より凡十五町老杉鬱蒼として、神威赫々、自ら襟を正さしむ。按に神武天皇、東征の事成りて後、可美真手命(物部氏の祖)に勅

して布都乃靈劍を殿内に祀らしむ。命即ち十種の瑞寶を合せて共に鎮祭す。崇神帝の時に至り、同族伊香色雄をして、今の地(即ち山邊村布留)に社を建て宮中より移し奉らしむ。仍て石上大神といふ。垂仁帝の時皇子五十瓊敷命に命じて劍千口を造りて、此社に藏めしめらる。爾來歷朝多く兵仗を納めらる。これこの神宮を以て武庫となし、國の變亂に備ふる爲といふ。故に本社(即ち延喜の制)の建築常(即ち延喜の制)に異なれり。延喜の制によれば、社門の鑰匙は、常に官庫に納め、祭に臨で神祇の官人を遣はし開門掃除せしめらる。かくのごとく特別の故あるを以て神領を附せらるゝことも多く、後には四十餘町に及び、近郷の百姓奉じて氏神とするもの五十餘郷にわたれりといふ。神祇志大意

桃尾瀧

桃尾瀧は布留の瀧ともいふ。山ふかくして夏猶冬のごとし。飛泉三反絶氣窮なし。丹波市驛より凡二十町。

天理教會本部

天理教會といふものは、近年世におこりたるが、その本地は本郡丹波市にあり。奈良鐵道にて丹波市より昇降するものは、十の八分はこの教徒たるがごとし。本教會所は停車場より僅に五町にして、その家は驛より望み得べし。この驛はもと一小村に過ぎざりしが、この教會堂出來てより移住者續々として、今は殆んど四百戸以上に達せ

り。教會本堂は土地に稀なる大厦なるは言ふも更にて、これが附屬の小舎に至るまで、壯大目をおごろかさざるはあらず。附屬の教室のごときは恐くは當國學校中第一の壯觀なるべし。かくのごとくなるが故に、教會堂の近傍には商家軒を接し、その門前通りは、都の町のごとし、旅館あり、割烹店あり、衣服店、文房店、書籍店、飲食店、雜貨店等一として備はらざるはなし。

按に天理教々祖は、中山みき子といひし婦人なり。婦人は寛政十年四月に山邊郡三味田に生れ、父を前川半七といひ母をきぬ子といひたり。十三にして同郡三島の中山家の養女となり、十五にして同家の善兵衛といふに嫁せり。幼より敬神の念ふかゝりしが生長するに従ひ、愈々その心をこらし、殆ど狂人のごとくなりき。夫

善兵衛は之をよろこばず、家庭おもしろからざる間に遂に死去せり。婦人は夫より大に覺悟する處あり、益々信心を固くし、この天理教の基をたて、その宗祖と敬はるゝに至りしなり。婦人は明治二十一年一月八十九歳にして歿せり。その墓はこゝより數町の山上にあり。委しきことは天理教祖一代記中山重にあり。

大和神社

大和神社即ち古來大和坐大國魂神社と云ふ是なり。朝和村大字新泉にあり。官幣大社なり。正殿拜殿、攝社、末社、幄舎及び神饌所、社務所、神樂所等あり。これ大已貴命の荒魂なり。又大地主神ともいふ。八千矛神、御歳神を配祀せり。初め天祖と共に宮殿の内に祭られし

を、崇神帝の時に市磯邑に社を建て、祭らるゝ事とせられたり。爾來今に至りて朝廷の尊崇怠りたまふことなし。この社元永元年に火災にかゝり、今なるはその後の建物といふ。柳本停車場より十町。

磯城郡 式上式下及び十市郡を合せたるもの

柳本町

柳本町は舊柳本藩といふ。織田氏の舊治たり。(元和中織田尙長以來相續して明治維新に至れり。柳本といふは、その初、柳本彈正こゝに居りし故とぞ。)戸數五百餘、停車場あり。紡績會社あり。その繁華芝驛と相似たり。驛より凡そ十丁許の處に有名なる櫻あり。春

の頃はわざ／＼見物に来るもの多しとぞ。

崇神天皇御陵

崇神天皇の御陵は、柳本村大字柳本に在り。山邊道上陵と號す。兆域周圍六百三間餘、御池の堤には櫻の並木あり。陵畔に陪冢あり。

景行天皇御陵

景行天皇の御陵も柳本村大字澁谷にあり。山邊道上陵と號す。兆域周圍六百四十八間餘、陵畔陪冢あり。

珠城及び日代の宮址

珠城宮は垂仁天皇の皇居、日代宮は景行天皇の皇居なり。二宮は共に纏向村穴師にありしなり。大和志には珠城宮は穴師村の西、日代宮は穴師村の北にありといへり。然れども今は孰れも詳ならず。

纏向山及び纏向川

纏向山は三輪山の東北に在り。峰を弓月嶽といひ、南を檜原山といひ、北を穴師山といふ。東初瀬山に連る。小孤峯あり、珠城といふ。大和志若御魂神社は即ち檜原にあり。萬葉卷むくの檜原にたてる春霞

同

足曳の山川の瀬のなるなへに

同

人

くれし思ひはなつみけめやも

人

磨

弓月かたけに雲立わたる
纏向川は、一に穴師川といふ。纏向山よりいで、舊城下郡に至り初瀬川に入る志

箸塚

箸塚は箸中村にあり。倭迹々日百襲姫命なり。命は孝元天皇の皇女にして、性聰明能く未然を識りたまひきと云ふ。三輪町より十町ばかりなり。

三輪町

三輪町は大神神社の前にあり。戸數五百餘。郡役所、警察署、區裁

判出張所あり。市街繁華。旅館の中に梅忠樓とて、彼の梅川忠兵衛の宿りきといふものあり。南天の床柱にて名を得たり。町の東方に三輪の大鳥居あり。三輪教會所あり。

三輪山

三輪山一に三諸山又神並山ともいふ。三輪町の東方に聳ゆ。山形陣笠のごとし松杉生ひ茂れり。山頂に不動薬師地藏三石の像あり、奥の不動といふ。又彌勒石像彌勒石等ありとぞ。山頂以下萬葉味酒三輪の祝の山てらす

秋の紅葉のちらまくをこも

同 三輪山をしかも隠すか雲だにも

同 人

長屋王

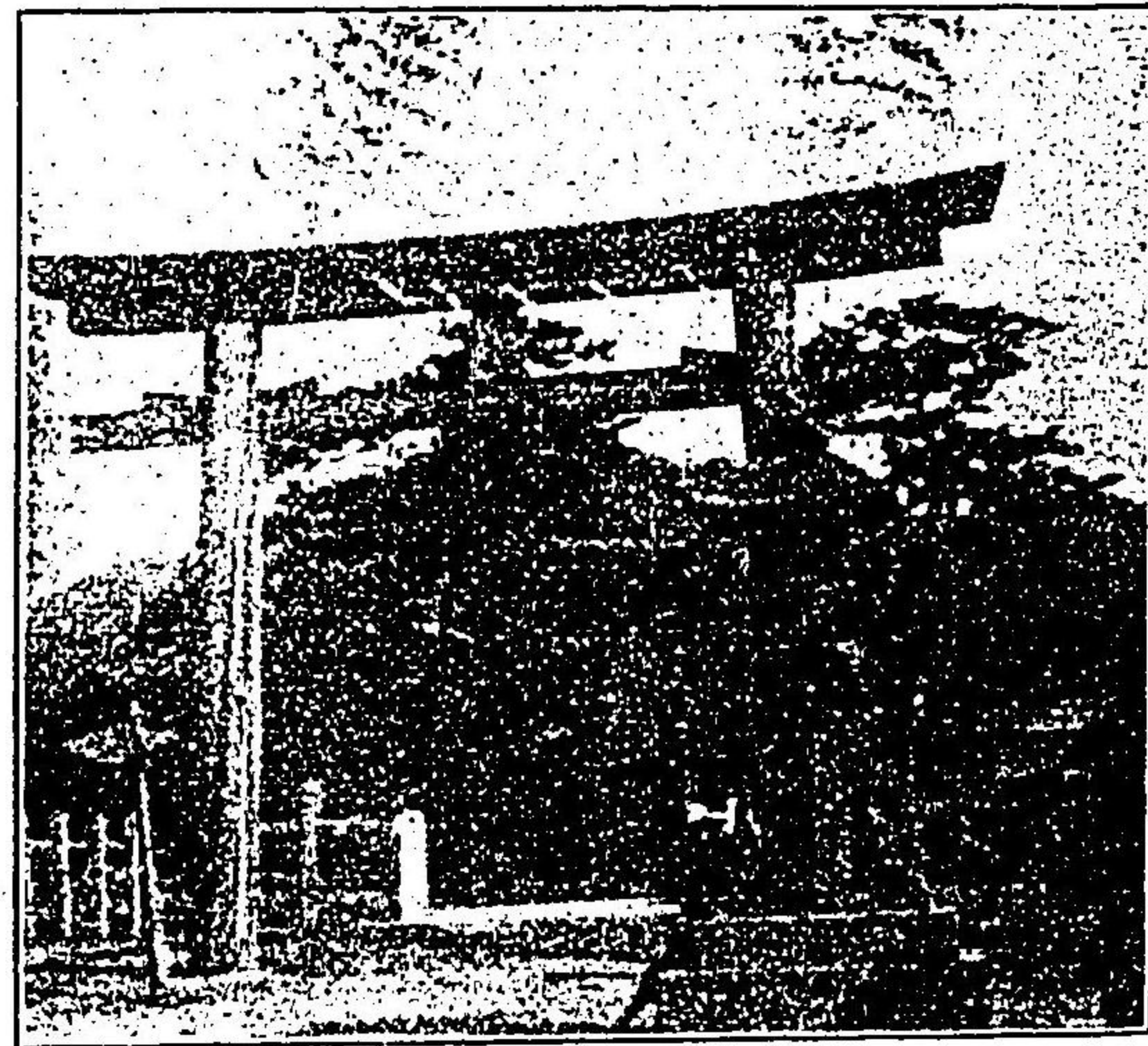
心あらなむかくそふへしや

大神大物主神社

大神大物主神社は、三輪山の麓にあり。官幣大社なり。大己貴命の和魂を祀る。大己貴命は即ち大國主命なり。この命既に國を皇孫に譲り奉りて後、魂を此山に留めて皇家を護らんことを誓はれしにより、この御社は成りしなり。世に大三輪の神といふ。崇神帝の時神裔大田々根子を祭主として世の災害を穰はれし事あり。又吉足日命を以て祠に侍せしめ、姓を宮能賣公と賜ひし事あり。清寧天皇々子なして大伴室屋をして幣を奉して祈らしむ、時に神託あり云く。天皇患ひ給ふことなかれ、我少彦名命と天下を経營し、永く皇孫を護る、天

胤いかに絶ゆることあらんや。天皇即ち磐境をたて少彦名命を併せ祭らる。延喜の制大社に列し、四度の官幣に預る。後世本國の一の宮と稱す。

按に我が國神社多しといへども、その鎮座の最も古きは、この御社を推すべし。この三輪山は蓋し大國主命一族の出雲より此に入りた



(國和大) (六〇一)

まひての根據地、後世のいはゆる城廓たるべし。この國久しく三輪氏の治下に在りしことは、古史を見て知らるゝのみならず、今現にこの神の社及びその一族の神社の多きにて明なり。神武天皇以下數代、三輪氏は實に皇室の外戚にておはしたり。初め大國主神の誓のごとく、いつくまでもこの氏人は我が皇家の護衛の任を盡されしなり。

この社に社殿なしといふこと、奥義抄に説あり。然れども全く殿舎なきにあらず、拜殿以下は古くよりありしなり。そは崇神帝の時の歌に三輪の殿戸をといふことあるにて知るべし。本殿なきは山の神杉をやがて祭るものにて、この山に神靈をさぐめられたればなり。是蓋し我が古儀なるべし。古史に神籬をたてて祭るといふ

舒明天皇御陵

欽明天皇の御陵は城島村大字忍坂にあり。押坂大内陵と號す。兆域周圍二百三十五間。田村皇女、大伴皇女、鏡女王等の墓、共にこの陵域内に在り。

泊瀬山及び泊瀬川

泊瀬山は初瀬町の上にあり。嶺めぐり谷幽かにして古へより隱口の泊瀬といへるに違はず。

萬葉隱口の泊瀬をどめか手にまける

山前王

玉は亂れてありといはじやも

同 隱口の泊瀬の山の山ぎはに

人

磨

いざよふ雲は妹にかもあらむ

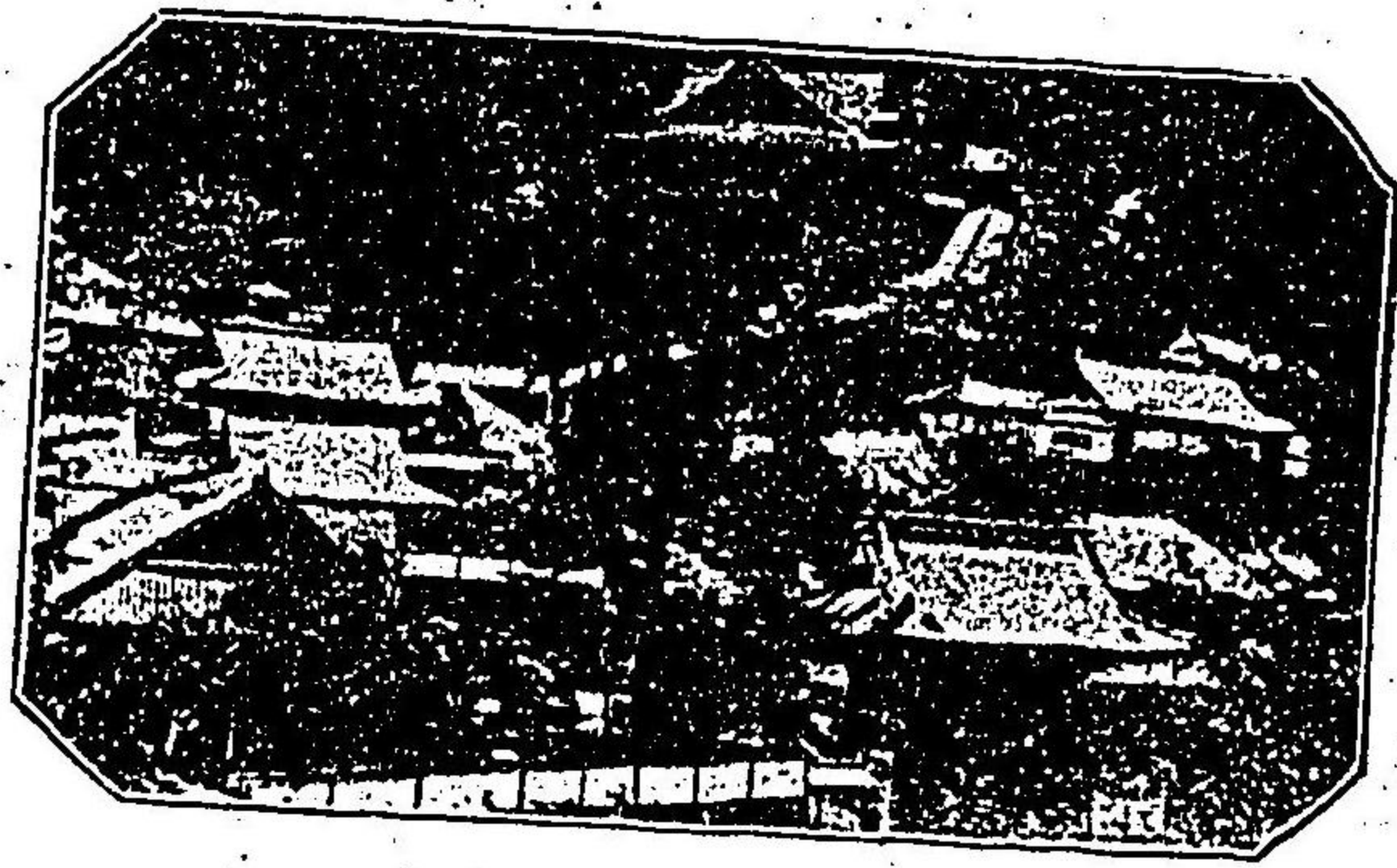
泊瀬川は水源二あり、一は金平山より出て、一は山邊郡並松池より出て本郡小夫笠村を経て和田村に至り、二水相合し初瀬出雲黒崎慈恩寺金屋三輪豊前を經過して江堤に至り城下郡に入る志大和古今初瀬川古川のべに二本有杉年を経て又も逢見ん二本有杉

讀人不知

長谷寺

豊山神樂院長谷寺は泊瀬町の上泊瀬山に在り。元正天皇養老五年の草創なり。本堂は十一面觀世音を安置す。藤原房前大臣金を捨て之

を助け成しきとぞ。いはゆる寺門前の町
 を通りゆけば、樓門あり、南面せり。夫
 より瓦葺の長廊ありてその下に石階數百
 段あり。これ諸堂へ上る路なり。貫之の
 故事ある梅なども、この道中に在り。登
 り詰めし處に更に大樓門あり。夫より本
 堂に入る。八棟造にして、その舞臺より見
 おろせば今登り來りし長廊より初瀬の町
 は更なり、向ふの丘山與喜山天神社など
 も眼中に在り。佛前のありさまは京都の
 清水堂のごとし(清水はこゝを移しとな



(二一一) (國和大)

り。(本堂の奥に三社あり、又不動堂大日堂等あり。延喜式によれば
 この寺の料稻二千四百束と云ふ。その他に喜捨田等の事もありて、
 古は最も殷富を極め、従つて本堂の外に佛堂寺坊學寮等、頗る繁
 盛せり。中古の物語文等に長谷寺詣の事あるは即ち此寺にて、京都
 より女房など屢々往來せしなり。この寺創立以後屢々火災にかゝり、
 數回の建築を重ねて今に至れり。本寺の縁起は菅公の筆といひて、
 好古家の玩ぶものとなれり。
 寺前の町には旅館割烹店等専ら參詣人のために構へ成せるが多し
 三輪驛より凡五十町、花紅葉に名たかき靈山なり。

鷲峯山竹林寺

(三一一) (國和大)

竹林寺は上之郷村大字笠にあり。依て笠寺の荒神ともいふ。藤原不比等の創建なり。昔し役の行者住みきといふ。荒神は三座なり。

多武峯別格官幣談山神社

多武峯は多武峯村に在り。談山神社は藤原鎌足公をまつり、麓より凡五十町の上に在り。維新前までは妙樂寺護國院と號して、彼の定慧和尚(鎌足公の子)の建立せし廟塔及び寺院等ありしが、明治以來神佛混交を解きてより全山のありさま一變し、僧坊等は大方毀れたり。依てその廟には改めて、別格官幣談山神社の號を賜はり、神として祭ることとなれり。
正殿拜殿樓門東西透廊東西寶庫神廟拜所その他攝社末社等多し。そ

の神廟は、十三層にして定慧和尚が唐土清涼山寶地院の塔を移し作りしものといふ。その盛なりところは僧坊四十區以上ありきといへり。

社殿は屢々火災にかゝり、今の建物は寛文中の物とぞ。

社記によれば本尊鎌足公の像は國家兇變ある時には必ず破裂せらる

といふ。歴史にも此事見えたり。

菴羅樹といふもの社内に在り。これは和尚の唐土より持來りし樹と

いふ。この山老杉鬱蒼清風爽颯たり。社前に商家數十戸あり。旅館

花の中宿紅葉の中宿あり。全山櫻多くまた紅葉多ければ春秋二季に

は登山者絶えず。

尋ね來てこゝもさくらの岑つゝく

雅章

吉野初瀬の花の中宿

初瀬より吉野に至らんには此にて一泊し、吉野より泊瀬に下るにも
こゝにて宿する道ゆきなればこの歌あるなり。登山の道は甚嶮はし
からず。定慧和尚の墳、こゝに在り。碑に入唐求法沙門定慧和銅七
年六月廿五日春秋七十端坐遷化とあり。又増賀上人の墳もあり。上
人は長保頃の人にて、この山に籠つて遂に歿せしなり。
按に鎌足公の墓本は攝津三島郡阿威村に在りしを、定慧和尚こゝ
に改葬してこの廟を建てたりと云ふ、事は阿威村の條にいへり、

如覺禪師の墳

如覺禪師とは高光少將といひし人にて、九條右大臣師輔の子なり。

大鏡にこの人の小傳あり、その出家の時の歌とて月のくまなきを見
てかくばかり経がたく見ゆる世中にうらやましくもすめる月かな
とあり。初めは横川に住み後に多武峯に入りきといふ。

崇峻天皇御陵

崇峻天皇の御陵は、倉梯岡上陵と號す。多武峰村大字倉梯にあり。
兆域周圍百二十間。

池邊雙槻宮跡

雙槻宮は用明天皇の皇居なり。今の安部長門の間なりとぞ。池邊と
は磐余の池の邊なれば名つけしなり。

玉穗宮跡

玉穗宮は繼體天皇の皇居なり。磐余の池の邊なり。

櫻井町

櫻井は奈良鐵道の發着地なり。近代日を逐て繁華に赴き殆ど六百に及ぶ。市街清潔にして旅館は皆華樓以下數軒あり。警察分署大和物産會社、櫻井材木會社等あり。この界限にての小都會なり。

養栗宮跡

養栗宮は清寧天皇の皇居なり。磐余池の近傍なり。

耳成山

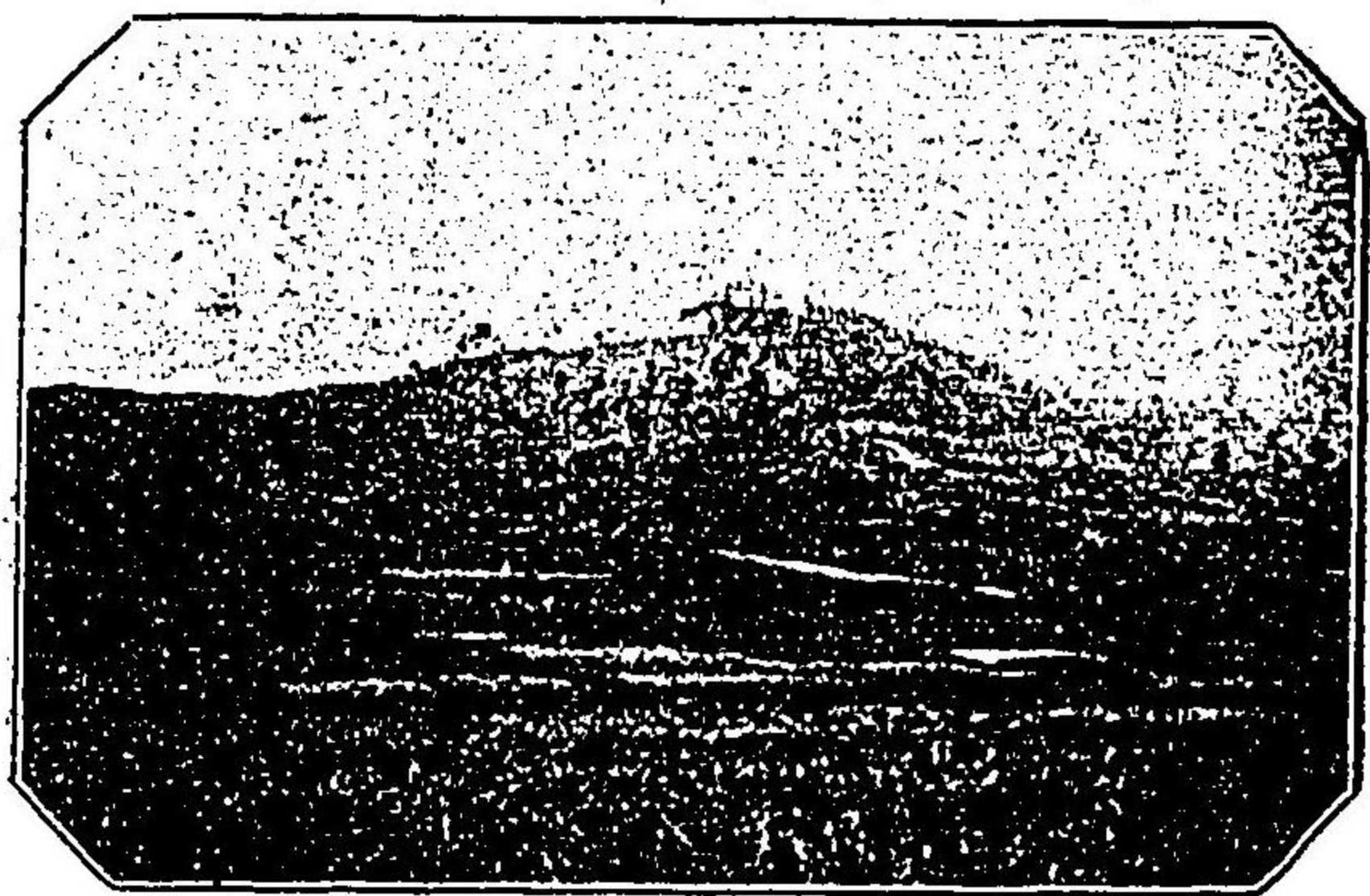
耳成山は天香久山の北西にあたりて立てり。この山形うるはしく樹木生ひ茂りて優美なり。古くより史に見え、歌にもよまれて名だかきこと人の知れるがごとし。山中に梔子樹多しと云ふ。故に一に梔子山ともいふ。この山の西麓に古へは耳梨池といふがありしなり。萬葉集には山のうたも池の歌もあり。

稚櫻宮跡

稚櫻宮は神功皇后の皇居なり。池内に在り。市磯池といひじもこの邊なりしなるべし。

天香具山

天香具山は大和三山(畝火、耳成、香具山)の一なり。全體大和は四方山にして國中は平なるに、この三山はその平地に各一里ばかりづゝ離れて鼎足のごとく相立てれば古きより歌にもよみなどして名高きものとなれり。この山古へはその形も整ひ樹木なども生ひ茂りたりけんを(萬葉集)に取よそふ天のかく山とあり。(今は段畑の高きものゝやうになりて、形わるく



(大和國) (〇二一)

見くるし。又埴安池などいひこも古はこの麓にありて、眺望もたゞならざりけんを、今はその池もなくて田圃となりはてたれば、更に景色の見るべきものもなし。(萬葉考別記)にこの山の事を説いてその畝の本につきて二町四方斗の池あり是ぞ古への埴安の池の残りなるとあるをおもへば寛政の頃まで猶残りしなり。(この山は我が國の歴史に最も古く見わたる名山なり。池尻、池内などの大字残り。萬葉いにしへの事はしらぬを我見ても



讀人不知

(大和國) (一一一)

久しくなりぬ天のかく山
この山の持統天皇の御製は、誰も知れり。天皇の皇都たりし藤原宮跡
はこの山の下わたりなるべし。

田原本町

田原本町は舊平野氏の采地なり。戸數六百餘、警察分署、私立病院
等あり。市店繁榮す。耳成山の西北に位す。

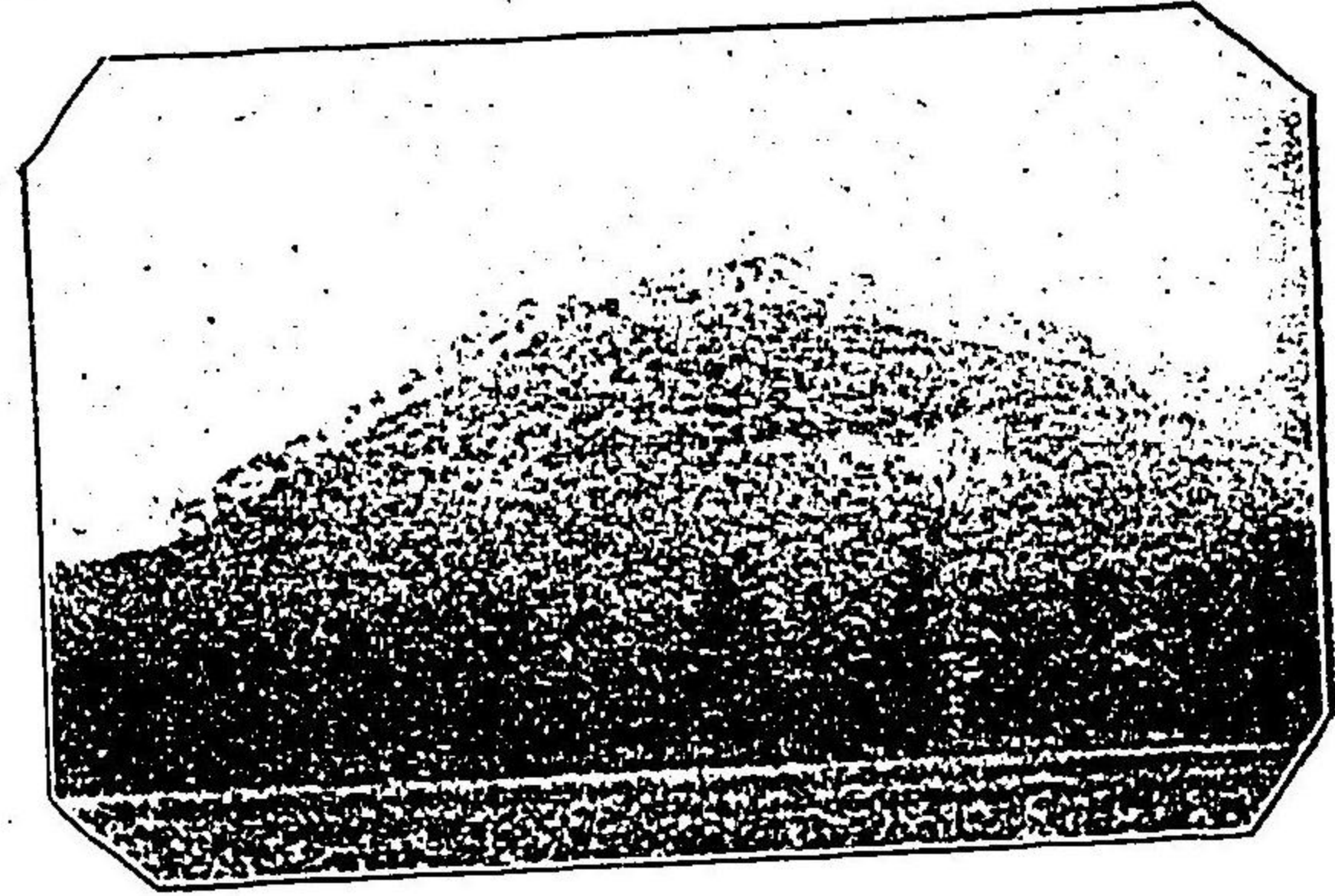
高市郡

今井町

今井町は畝傍停車場より入りゆく所にて
本郡の北方にあり。停車場前に畝傍中學
校あり、その前を通り西行して蘇武橋を
涉ればやがてこの町に至る。戸數六百に
近く、市街聯れり。木綿及び煙草を産す。
旅館柳下亭以下數戸あり。

畝傍山

大和三山の一なる畝傍山は巍然として畦
榎村の上方に特立せり素より他山の相連
なるものなし。山には松杉叢生せり。山



(三二一) (國和大)

上に神社あり、畝火山口坐神社といふ、明治以前までは國源寺といふ寺ありき。

萬葉思ひあまりいともすべなみ玉手すき

畝傍の山にわれぞじめ結ふ

神武天皇御陵

神武天皇の御陵は、畝傍山東北陵と號す。白檀村大字山本即ち畝傍山の麓にあり。兆城周圍四百三十八間。石柵を結び廻らし大鳥居を立つ。陵前に小舎あり、即ち護衛官人の詰所なり。近時この邊益々開けて小旅館飲食店寫真店等出來、參詣人に便する事少からず。按に皇祖神武天皇は我皇室及び國家の基礎を建て玉ひ、聖壽一百

二十七歳にして崩せられしかば即位七十七年の九月に此に奉葬せしなり。爾來世を経ること殆ど三千年皇統連綿天壤無窮なる、世界いづれの國か我國のごときあらん、この御陵を拜するもの、天皇の八紘を掩ふと宣ひし大詔に鑑み帝國の威信の既に東洋に冠たると共に愈々益振興し以て世界萬國を掩はんことを期せざるべからず。

綏靖天皇御陵

綏靖天皇の御陵は、桃花鳥田丘上陵と號す。白檀村大字四條にあり。兆城周圍百四十三間。これ實に人皇第二代の天皇におはして神武帝の第三の御子聖壽八十四にして崩御あらせられしなり。

安寧天皇御陵

安寧天皇の御陵は、畝傍山西南御陰井上陵と號す。白檀村大字吉田にあり。兆域周圍二百九十二間。綏靖天皇第一の御子、聖壽五十七にして崩じたまひしなり。

懿德天皇御陵

懿德天皇の御陵は、畝傍山南織沙溪上陵と號す。白檀村大字池尻にあり。兆域周圍二百八間。安寧天皇の第二の御子。聖壽七十七にして崩じたまひしなり。

孝元天皇御陵

孝元天皇の御陵は、劍池島上陵と號す。白檀村大字石川にあり。兆域周圍三百五十七間餘。

檀原神宮

檀原神宮は、神武天皇及び皇后媛踏五十鈴姬命を祭る。官弊大社なり。明治廿三年の建立なり。御本殿は京都御所の温明殿（即ち内侍所）拜殿は同じき神嘉殿を移し建てられたるものなり。寶庫、神饌所、祭器庫、社務所、神符授與所等あり。又御本殿の後に千鳥の池あり、一の御鳥居を入りたる處に鏡の池あり。御鳥居前に神武教會本部あり。

り。休息飲食店等あり。

靈禪山東塔院久米寺

久米寺は白樫村大字久米にあり。聖徳太子の弟來目皇子の御願に
て本尊は薬師如来なり。正堂、地藏堂、影堂、多寶塔等あり。僧舎
あり、東塔院といふ。境内に鍊塔と稱する七重塔あり。傳へ云く、
養老年中西天竺の善無畏三藏來朝の時印度支那日本の砂土を以て造
りしものなり云々。

益田池の碑

益田池の碑とて、今久米寺の境内に近頃建てたる自然石の碑あり。

記文は古の碑文即ち弘法大師の書を寫し彫りたり。

按に益田池とは嵯峨帝弘仁四年に墮りしものにて、頗る廣大なり
しもの也。こゝはもと村井といひて漢直の舊宅なり。早魃打續き
て、田畑の愁を爲すこと甚しかりしかば、弘仁年中前大和守藤原
繩主紀伊守末等此所の地理佳なる事を辨へ、池を掘るべきよし奏
聞しければ。忽に勅許あり、繩主等即ち眞圓律師と相語らひ鑿
池の事に取かゝりぬ。かくて成りしが即ちこの池なり。弘法大師
即ちその銘を書し傍に碑を建てたり、然に世を経るに従ひ、池
も埋まり、碑も滅びて今はその趾さだかには知られず。圖會に久
米寺のほとりに、花出山といふあり、その際に益田池の趾とて幽
かに遺れり。其西につゞきて池尻村といふあり是より南に碑をす

るたる臺石今にのこれり。池尻より此まで半里計の間むかしは池なり、碑銘に廣太の池と書れしも思ひやられたり、今は僅にのこりて芝生となる昔の池の岸とおぼしき所に弘法大師の建たまひし碑の硤石あり碑はなし、いつの代いかなる人の外にうつしけん其由縁をこらず、その碑文も世に傳ふるを見るに末に至つて縦横放蕩なる大字等もさまざまあり、試に之を連續して見れば、許多の大碑なりとあり。

芋洗ひ川芋洗ひ芝といふもの、この邊りにあり。久米仙人の故事なり。

宣化天皇御陵

宣化天皇の御陵は身狭桃花鳥坂上陵と號す。白檀村大字鳥屋にあり。兆域周圍二百七十九間。

齊明天皇御陵

齊明天皇の御陵は越智岡上陵と號す。越智岡村大字車木に在り。兆域周圍四百八間。

欽明天皇御陵

欽明天皇の御陵は檜隈坂合陵と號す。坂合村大字平田に在り。此に吉備津姫命の御墓もあり。異様な石の人形四軀陵内に在り。兆域周圍四百四十六間。

鬼廁鬼肉儿

鬼廁鬼肉儿と稱するもの此の近傍に在り。蓋し古の石棺なるべし、或は倭彦命の御墓より出でしものといふもあり。命の御墓はその上にあり。果して然りとせば、これ恐き限りなり。研究すべき事なり。

檜隈川

檜隈川は高取山より流れいで、檜隈を經、眞弓に至りて、眞弓川といふ、又見瀬を經、久米に至りて久米川といふ。畝火山の西をめぐり、曾我に至りて曾我川となり遂に廣瀬川に落つ。大和志

天武持統兩天皇御陵

兩天皇の御陵は、檜隈大内陵と號す、高市村大字野口にあり。御合葬なり。持統天皇は、天武天皇の皇后にして我が國天皇御火葬の始なり。兆域周圍四百九十間餘。

文武天皇御陵

文武天皇の御陵は、檜前安古岡陵と號す。坂合村大字栗原にあり。

兆域周圍三十間餘この天皇も御火葬なり。

按に天皇の御陵、その上代なる即ち我が固有の制は、前方後圓にして山のごとく陵のごとく、四方に池を掘り、その兆域四五百間に及ぶは珍らしからざりき。然るに佛法傳來火葬の事朝廷に採用せさせたまひし以來、御陵顧に縮少せられしことかくのごとし。中古に至りては御骨を塔中に納むること行はれ、遂に山陵の制すたれしなり。

高取山城跡

高取山は土佐町(即ち植村氏の舊治)といふより登ること凡そ五十餘

町。坂路羊腸要害の地なり。南朝此に城を築きて北兵を防ぎ享祿天文の頃には、越智利元之に據り、後豊臣秀長と、本多氏とをして之を守らしめ、次に脇坂安治をして之に代らしめ次に本多俊政その子政武をして之を守らしむ。寛永十八年植村家政之に代れり。さて維新前に至れり。大和志 高取町は今は頗る衰へたり。

壺坂寺

壺坂寺は南法華寺といふ。清水谷の東壺坂山にあり。八稜堂、禮堂、三層塔、鐘樓等あり。大寶三年弁基大徳の建立といふ。左大臣長屋王燃燈田を施入せられし事あり。延喜式には寺料三千束と見ゆ。維新までは僧坊十二宇ありきとぞ。

佛頭山上宮院橋寺

橋寺は菩提寺といふ。正堂に聖徳太子を祭る。聯句あり、記して云く、日本佛法最初地、聖徳太子誕生所。こゝは太子の初て勝鬘經を講せられし處とぞ。殿の左側に蓮華墳(一に畝割塚)あり。この寺屢々火災にかかりしを、元治元年に再建の起工を擧げ明治二十六年に竣功せし趣を記せる碑あり。こは本郡有志者の建てしものなり。されば寺の由來の古きに拘はらず、全體の伽藍頗る新らし。こゝを橋寺といふは橋都の跡なるが故とぞ。

飛鳥川

飛鳥川は畑の山中より出て稻淵を経祝戸に至りて細川と合し、岡飛鳥四分等を経、今井に至りて蘇武川といふ、この川昔より淵瀬の替ること速かなる旨いひふらされたり。

列樹

流れて早き月日なりけり

同 世中は何か常なる飛鳥川

讀人不知

きのふの淵はけふは瀬になる

後撰 淵は瀬になりかはるてふ飛鳥川

元方

わたり見てこそ知るべかりけれ

難波堀江七瀬淀なごいへるは、この川邊なり。

飛鳥坐神社

飛鳥神社は飛鳥村大字飛鳥にあり、四座なり。その一は大國主神の子賀夜奈流美命を祀り。古史に大國主神その子賀夜奈流美の靈を飛鳥の神奈備に栖ませて皇家の鎮衛と爲すといふ是なり。社傳に事代主、建御名方、高照姫、下照姫を祀れりといふは疑ふべし。神祇初め飛鳥村神南備山に建て、神南備飛鳥社といひしを天長六年にこの地に遷されたり。末社凡そ九十ばかりあり。酒槽石といふもの社の南方酒谷山に在り。傳云く、この神の神酒を醸したまひしものなりと、社内に井あり飛鳥井是なり。

廢飛鳥寺

飛鳥寺一名元興寺の趾は飛鳥に在り。今安居院といふものその遺跡とぞ。

廢川原寺

川原寺一名弘福寺の趾は川原にあり。

廢大官大寺

大官大寺は小山の東にあり。今礎石僅に存せり。



以上飛鳥、川原、大官、上古之を三大寺といひたり。就中飛鳥寺は最も大にして朝廷の尊崇も一方ならざりしなり。類聚三代格貞觀四年の官符に云く、此寺、佛法元興之場、聖教最初之地也。去和銅三年帝都遷平城之日、詣寺隨移二件寺一獨留朝廷一更造新寺一備其不レ移間一所謂本元興寺是也と見えたり。當時は四方に門ありて、東門の額に飛鳥寺、西門の額に法興寺、南門の額に元興寺、北門の額に法滿寺と記されしことぞ、この大寺の跡今は田圃となれども、その礎石をたづね形勢を考ふるに兆域の廣大なりしこと推測せらる。天武帝の飛鳥淨御原宮趾、齊明帝の川原宮趾及び板蓋宮趾、孝德帝の飛鳥河邊行宮趾允恭帝の遠飛鳥宮趾顯宗帝の近飛鳥八釣宮趾等、いづれもこの界限に在り。その甘樫の丘は允恭帝の時、盟神探湯を行

はれし處にして飛鳥寺趾のほとりに在り。又甘樫神社あり。この邊聖德太子全盛時代蘇我一族專横時代の遺跡歴々として徴すべし。考古の士は深く思を致すべきなり。

向原寺

向原寺一に廣嚴寺に作る。豊浦に在るにより豊浦寺ともいふ。これ蘇我大臣が初て自らの宅地を捨て寺となしたりし處にて、我が國佛寺の始なり。但し今ある建物はるかに後世のものにて素より考古の徴とならず、傍に井あり。櫻井といふ。該紀に童謠をのせて、豊浦寺の西なるや、おこととおこと、櫻井に白壁しつくや云々といへるは是なり。

雷丘

雷丘は飛鳥村大字雷土にあり。これ雄略天皇の勅を奉じて小子部
栖輕が雷を取獲し處といふ。後天皇の行幸なごもありて名所た
り。

萬葉 天皇は神にこませば天雲の

人 磨

雷の上にいほりせすかも

とあるはこの地なり。この村に大國魂神社あり。俗に入王子と稱
す。

南淵先生墓

南淵先生の墓は稻淵村即ち飛鳥川の川上に在り。今明神塚といふと
ぞ。大和 先生名は請安、大化時代の大儒たり、中大兄皇子鎌足等の師
たり。蓋し大化の改新は、先生の力その多きを致したりしなるべし。
南淵山はこの上にあり。瀧の名所なり。

萬葉 ます鏡南淵山はけふもかも

白露おきて青葉ちるらん

東光山龍蓋寺

龍蓋寺は即ち岡寺なり。舒明帝の皇居岡本宮の地なれば、かくいふと
ぞ。この寺は天智帝の御願にして、義淵僧正の開基なり。正堂、祖師
堂二小祠、力士門及び僧院一字あり。樓門は岡本宮殿の古御門な

り。これと力士門と倉庫との三つはその時代のまゝなりと云ふ。義淵僧正の像あり。この寺は岡村の東にて登ること數町なり。途中に治田八幡宮あり。この寺より見おろせば、橋寺飛鳥川より高取の方面眼中に在り。躑躅多ければ、晩春の頃は、かた／＼參詣人絶えずとぞ。岡村には旅館あり、諸商店あり。八木街道より多武峯に上る道筋にて賑合へり。

高市御縣坐鴨八重事代主神社

事代主神社一に高市神と云ふ。鴨公村大字高殿に在り。古史に事代主神の歸順せらるゝや、その靈を宇奈提の神奈備に栖ませて皇孫を護衛せんとのある即ち是なり。故に宇奈提の森の神ともいへり。延喜の

制大社に列し四度の官幣及び相嘗祭に預り給へり。

宇陀郡

小野榛原

小野榛原は榛原町萩原に在り。これ神武天皇東征の功成りて後、靈時を鳥見山に立て、皇祖天神を祭られし趾にて、當時は上小野榛原下小野榛原といへり。萩原は戸數三百三十餘、警察署あり。

伊那佐山

伊那佐山は山路村の上方に在り。これ神武天皇東征の故蹟にて、楯並

めて伊那佐の山の云々の御製のありし地なり。
高倉山(守道村の西より東莊村に及ぶ)女坂(宮奥村の西)男坂(坂村の西)墨坂(萩原村)血原(上田口村)等神武天皇の故蹟少からず大和今一々之を記さす。

日張山

日張山は宇賀志村に在り。山中に青蓮寺あり。尼寺にとてもとは中將姫の生まれし寺といふ。圖

大藏寺

大藏寺は大藏村にあり。上宮太子の草創なり。弘法大師嵯峨帝の勅

をうけて堂舎を建立す。天皇宸筆の大藏寺の額あり。圖

室生寺

室生寺は、室生山にあり。龍穴神宮寺なり。(龍穴神社は室生荷坂の氏神なり。神名帳に出づ)眞言宗にして弘法大師の開基なり。伽藍五宇五重塔十三級石塔及び小祠僧坊等あり。織田常眞の塔この寺中にあり。山は巖窟多く風景奇絶なり。樹靜に水流澄みて閑閑いふべからず。

松山町

松山町は本郡西南の一都會として、戸數四百に近く、區裁判所警察

分署等あり。松山城趾は町の東にありて、元和年中に織田高長初て封せられ元祿年間伊豆守信武に至りて丹州柏原に移してより城廢せり。松山城以下大和志

秋山城趾

秋山城はもと松山町の東北に在りて正平年中に秋山氏の據りし地なり。天文永祿中に秋山右近直國といふものあり。後福島氏代りて據れり。大和志
本郡は吉野山邊二郡の間に挟まり伊勢伊賀に續きて、山多く野廣し。故に古へは遊獵の地となりて。宇陀大野などいひしはこゝなり。吾妻野、吾城野などいひしも本郡にあり。又古へ氷室をも此郡に設

けられしこと史に見ゆ。今室谷といへるはその地なるべしといへり。

吉野郡

本國總て十郡あり、而して吉野郡は殆どその三分の二を占めたり。この郡東は伊勢飯高及び紀伊牟婁郡に至り、西南は紀伊牟婁日高有田伊都に至り、北は本國宇陀高市磯城宇智郡に接せり。かくの如く廣大なれども、大方深山幽谷にして、殊に紀伊に接近せる邊は、人跡も通はざる所少からず。本郡にて天下に名高きは吉野山なり。故に余は主として此の山の道むるべを記し、傍

ら他の名勝に及ぶべし。

吉野山

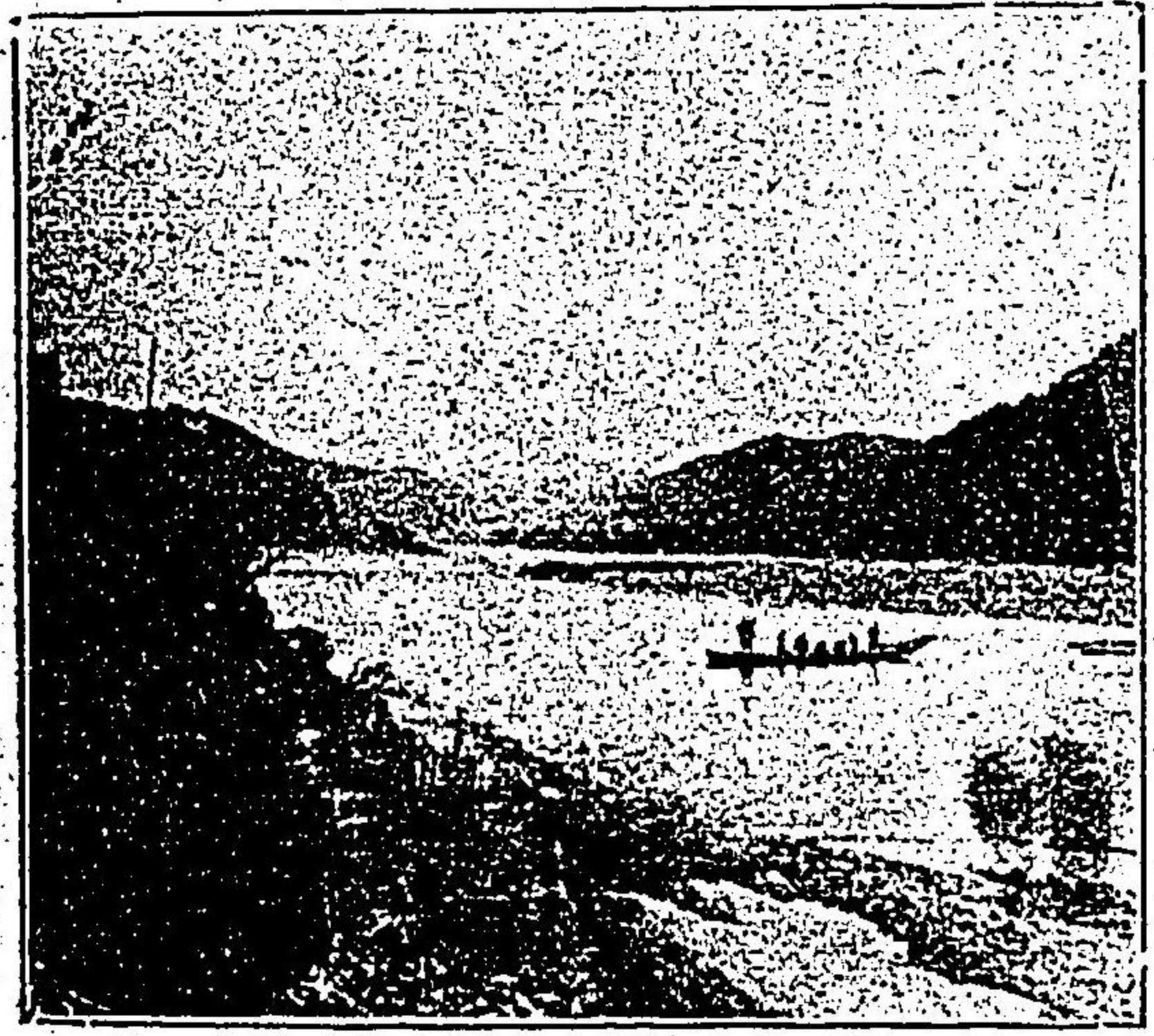
櫻といへば吉野を思ひ出で、吉野を聞けば花を聯想するは、蓋し邦人一般の感覺なるべし。實にやこの山の花は、たゞに海内の名勝たるのみならず、早く支那にも聞え、今は海を越えて歐米諸邦の人士も贊賞措くこと能はざるものとなれり。この山は花を以てかく名高きが上に、古來より、種々の歴史を有せり。神武天皇は東征の御時、この山に入りたまひ、應神天皇又こゝに行幸あり。次で天武天皇も入らせられ、持統天皇のごときは、離宮を興して毎年行幸あらせられ、文武天皇、聖武天皇も又臨幸ありけり。帝都

山城に遷り玉ひて後も、この山は朝野文人騷客の羨望する處たりしことは、古今集以下勅選歌集に本山の歌凡そ四百首に垂んとするにても知らるべし。名僧智識の此に入るもの頗る多く、又源平の時代には源義経は暫くこゝに忍びこころあり。こゝに南北朝に至りては、云ふまでもなくこの山は所謂南朝の中心となり、後醍醐天皇のごときは、遂に此にて崩御まじけり。歴史に文苑にかゝる名跡なるが故に、古來噴々として世に玩ばるゝは故なきにあらず。今この山に上るべき順序とその山上の名區とのあらましを書き示さん。

吉野川

なる六田里の柳渡をわたるべし。吉野川は古へ遊副川といひし川にて、吉野の奥大臺が原より流れ出づる水と、高見山より流れ落つる水と相合じ柴摘村に至りては柴摘川となり宇智郡を経て遂に紀伊の海に入るものなり。之を渡りて吉野山にゆくに梅の渡(瀬上渡)櫻の渡(上市渡)

柳の渡



(二五一) (大和國)

あり。これ奈良地方よりゆくに必ず渡るべきなり。この兩岸六田里といひて小旅亭小商估あり。向ふ岸に着けば、大峯院といふあり。この前通商家多し。この寺の左に添ひ阪路を経て上り行く間道あり。こは近道なれば、健脚の人は是よりするが便なり。(前の千本の處に出づ。)(本道はこの町を通り山を迂廻じ上りゆくなり。)(人力車も二人曳ならば上り得べし。)

一の坂

に至れば此より一町ごとに石標をたてゝその數を示せるなり。(吉野宮まで十四町藏王堂まで三十町餘)是より一目千本といふ處までを

長峯

(三五) (大和國)

といふ。この間櫻樹路の左右に樹立せり。

歌冢

といふは柿本人麿の冢と云ふものなるが、老松ありて、此より見おろせば、吉野川の流をへだてて上市はたゞ眼中に在り。月雪に流れてやまず、吉野川」といふ可翠の俳碑あり。

官幣吉野宮

に至れば山やうく高く眺望ますく佳なり。この宮は明治廿二年の創立にして本殿祭神は後醍醐天皇なり。攝社に御影神社(藤原資朝藤原俊基)船岡神社(兒島範長兒島高德櫻山茲俊)瀧櫻神社(土居

通増得能通綱)あり、社務所あり、繪馬堂あり。

村上義光墓

は舊薬師堂の趾にありて五輪の塔あり、傍に忠烈之碑(天明三年冬十月高取内藤景文字武立)あり。夫より豊太閤の花見せしといふ松山亭の趾を忍びゆけば、右方に聳ゆるは。

嵐山

なり。京都の嵐山はこの山の花を移し植ゑられしよりの名とぞ。

一目千本櫻

名に背かず、之を下しもの千本せんぼんといふ。此邊このへんより愈々佳境じやくかいに入るべし。
やくゆけば左方さほうに

御野立跡おんのたちのおと

と記せる札あり。こは明治廿三年めいし ねんの春、皇后宮陛下御登山くわうこうのみまへいかをとぎんあらせられことにて御休憩ごきゅうけいあらせられて、一目千本めせんぼんを賞せさせたまひし處ところなり。夫より幣掛神社七曲しでかけじんじやなまがり(多武峯たむのみねの方よりする道みち)なごを経て

大橋おほはし

あり。擬寶珠ぎぼうしゆに慶長九年けいぢやう ねん豊臣秀頼再修とよひでとみなりでりさいしゆせし趣おもむきを銘刻めいこくせり。是より數歩すうほにして

黒門即ち總門くろもん ちゆうもん

に至る。此より人家じんかつゞきにて即ち

吉野町よしのまち

なり。戸數こすう四百餘よといふ。

銅鳥居あかべのとり

は町まちの中なかにありて、高さ二丈五尺ぢやうご しやくはしら柱はしらの周めぐり一丈二尺ぢやうに しやくといふ。額がくは發心門はつしんもんと記して、弘法大師こうぼうだいしの筆ふでとぞ。

仁王門にわうもん

は即ち藏王堂の山門なり。康正年間の創立といふ。力士は各長一丈六尺。湛慶運慶の作とぞ。これを入りゆけば、やがて

藏王堂

なり。天平年間行基菩薩の創立にして、金剛藏王権現を安置す。大塔宮の此所に籠らせ玉ひし時二階堂隆道之を攻めて、本堂并に廻廊兵火にかぶりしが延元年中に再建せられしを、貞和五年高師泰師直等再び攻入りて之を焼たり。太平記にこの事を記して貞和五年正月十四日越後守師泰武藏守師直寄來る所に、帝は天川の奥賀名生の邊に落させ玉ひしかば、さらば焼拂へとて皇宮卿相雲客の宿所に火かけしほごに二丈五尺の金の鳥居金剛力士の二階の門北野天神社

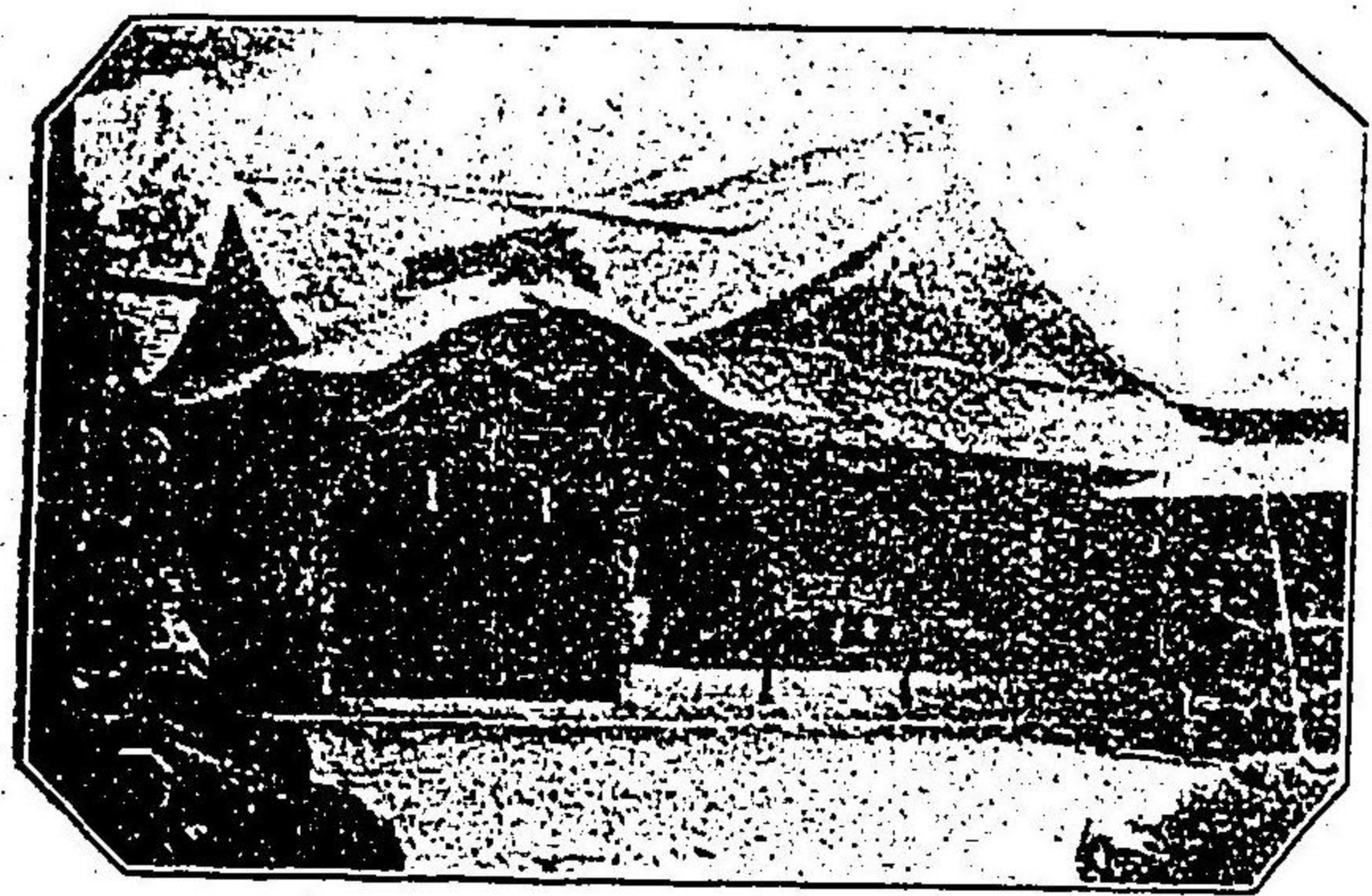
七十二間の廻廊三十八所並に藏王堂一時に烟となり云々とあり。この後康正年間に再建し天正十九年大修理を加へたるが、今の堂なり。十八間四面にして、高さ十一丈二尺。柱の數七十二、本堂内に神代杉の柱あり。長さ三丈五尺周り一丈三尺あり。又躑躅の木といふもあり。長さ三丈一尺周り八尺なり。

實城寺跡

實城寺は舊名金輪王寺と稱し、後醍醐天皇の行宮となりし所にて、藏王堂の西に在りしが、今は取毀たれて礎石だにもなし。

吉水神社

は即ち舊の吉水院にて後醍醐天皇の行宮
 なり。(吉水院は役行者の創立といへり。)
 明治八年以來吉水神社と改稱せり。太平
 記に天皇の御製「花にねてよじや吉野の
 吉水の枕の下に石はこるおと」とあるは
 即ち此處なり。天皇はこゝにて崩御し後
 村上後龜山の二帝も、こゝにて即位した
 まひこなり。今は昔の殿をそのまゝに神
 社とし、天皇の外に楠正成公をもまつ
 れり。されば當時の玉座の趾も残りて、
 見るものごとに慨せられざるはなし。此



(國和大) (〇六一)

には義經も潜居せし處なれば、その趾も遺れり。寶物も多し。天皇御
 筆の色紙をはじめ、綸旨、御祈請文、御調度類、文房具、樂器、武
 器、畫幅等數點あり。又源義經の腹巻あり。これは先年東京美術
 院にてつくろひ、今は國寶となれりと云ふ。

山口神社

この吉水神社の前を通りて聊上れば、山口神社あり。即ち勝手明
 神なり。(明治八年に山口神社と改稱)後醍醐天皇の「たのむかひなき
 につけても誓ひてし勝手手の神の名こそをしけれ」と宣ひしは此社な
 り。この後の山を、

袖振山

といふ。天武天皇此に行幸の時、神女降り舞ひきといふは是なり。是よりすこし右にゆけば、

村上義隆墓

あり。義隆は義光の子なり。大塔宮の爲に此にて敵と戦ひ死せし處。谷を越えて東にゆけば

如意輪堂

に至る。此は日藏上人の開基にて、古へよりの靈場たれども、小楠公の事より、世に博くきこゆるに至れり。近代修繕成り、堂前の石段なご能く整へり。この傍に、

小楠公警塚碑

あり。これは慶應元年に建てしものにて、撰文は大和人森田益、書は伊勢人三井高敏なり。このほとりに又藤本鐵石の招魂碑あり。

後醍醐天皇靈殿

この域内に在り。この上に、

後醍醐天皇家塔尾の御陵

あり。兆域周圍百二十五間餘。樹木生ひ茂りて、ふく風も當年の概あるがごとし。その下に、

世泰親王の墓

あり。こは後龜山天皇の第一の御子なり。

中の千本櫻

は、塔尾陵の麓にあり。

竹林院

は椿山寺ともいふ。即ち日藏上人(三好清行の弟)の住せし處にて、その庭は細川幽齋の好みにて、殊に名たかし。庭園中の少丘に登れば、山の西北の方を望み得。櫻樹多し。その庭には躑躅あり泉石あり。

上の千本櫻

は小山神社(天皇橋の側)の東南の隅なる櫻林をいふ。

雲井櫻

は獅子尾坂の上にある。後醍醐天皇の御製、

こゝにても雲井の櫻咲にけり

たゞかりそめの宿と思ふに

とある是なり。

吉野水分神社

は子守明神といふ社なり。延喜の制大社に列せり。

金峯神社

氣多大神（大日貴命及び比賣神を祭る。社傳には金山彦神といふ。）
これ吉野山の地主神にして、この山を金の御嶽といふは是よりおこ
るごぞ。大和俗に金精明神といふ。

蹴拔塔

金峯神社の側にあり。飛騨匠の建てしものと云ふ。義經記に義經の
の塔中に隠れ、敵追ひ來りしかば、宮瀧の方へ遁げゆきたりと云へ
り。

青根が峰

はこの塔の南方の高山をいふ。歌多し。

西行菴

菅清水といふより一町ばかりの處にて、西行の住みきといふ草庵あり。
上人の木像を安せり。上人の題「吉野山やがていでじごおもふ
身を花ちりなばご人や待らん。」今新古
吉野の町の入口よりこの邊まで凡そ一里といへり。一日の遊覽にて
事足るべし。吉野町には芳山館辰巳屋その他旅館多し。名産には櫻細
工の物多く、又檜杉の實あり。花の頃は、萬客雲集蟻の歩かん餘地も

なし。名所の寫眞等は町内の商店にも、また藏王堂の内にも賣捌き居れり。

大峰山

大峯山は即ち金峯山の最も高き處、一に大仙山と稱す。海拔六千二百十三尺といふ。山上に藏王堂あり。又役行者の自作の像あり。これいはゆる大峯入の徒の競ひ上る處にして鐘懸巖、湧出巖、屏風巖、儀門渡等の巨巖奇石相重なり、山勢峻はしく斷崖千仞げに古へは魑魅魍魎の住みし所なるべし。

丹生川上神社

官幣大社丹生川上神社は、南芳野村大字丹生にあり。正殿、拜殿、神饌所、神庫、社務所、幣使殿等あり。水神罔象女神を祭る。天武天皇三年に始て祠を立てらる。延喜の制名神大社に列したまへり。

賀名生行宮趾

賀名生はもと賀名生の莊といふ。吉野の西南方四里餘、宇智郡五條の南二里斗の地にして、紀伊の國境に遠からず。山遶り谷深く、人跡稀なる處なり。此に至らんに、五條驛より川傳ひに上りゆくを便とす。こゝは後醍醐天皇及び後村上天皇、御運拙くおはせし頃、籠りおはこまじたる地にして、今にて思ひ奉れば、髮逆立ち唇ふるはるゝ慨あり。

此の地には古く熊野別當の子孫某々等堀又は岸上氏と稱して隠れをりしが、初め天皇の潜幸し給ふや、堀信増は、その居宅を掃ひ清めて、之を迎へ奉り、以て假の皇居とせしなり。後村上天皇此に行幸し玉ふに及んで屋後の丘上に新に御所を營み、之を

黒木御所

といへり。その堀氏の居宅は、今日猶存して、嘗て一たび後醍醐帝の入り玉ひし所いはゆる茅屋竹椽たり。その黒木御所は、今は廢れて、田圃となれり。この深山幽谷の一草廬に戀輿駐まりたまひしこと、前後實に六十年、後龜山天皇元中九年に至りて初て都にかへりたまへり。堀氏には今猶當時の寶物數點を秘藏せりと云ふ。

華鯨樓

こは舊黒木御所に隣せる處にありきと云ふ。今は荒廢してその鐘のみ寶藏にのこれり。これは楠正行の河内より獻せしものなりとぞ。

鎮國寺

鎮國寺はもと神野山寺といへり。向賀名生にあり。(行宮趾より東十餘町)後醍醐天皇此に行幸して鎮國の號を賜ひ、又柴皇殿といふ宸筆の額を賜ひきといふ。今は荒廢して大師堂のみ残れり。

源親房墓

北畠准后源親房の墓は舊華藏院鐘樓の東方にあり。石あり高さ五尺ばかり、梵字を刻せり。

附 錄

第五回内國勸業博覽會

博覽會は、平和の戦争なり、農商工業等、あらゆる物品を陳列して、互に優劣を競ひ、優者は王冠を得て四方に號令し、劣者は卒伍に列なりて優者の走兒たるに至るべし、この王冠を授け、又は卒伍ならしむるものは、即ち我等觀覽人なり、さればこの場に入るものは、慰みの見物にとどめずして、その物品に向つて優劣を判する心を以て觀るべきなり、これ實に觀るものみづから益する事にして、又觀らるるもの益たる事なればなり。

この度の博覽會は、明治卅六年三月一日より七月卅一日まで、大阪

市南區天王寺、今宮及び泉堺市大濱公園等の地に開設せらるるものなり。之が爲に我が政府は博覽會事務局を設けて、その一切を統轄し、又私立の出品協會あり、又大阪市民の主動となれる、協賛會等あり、各府縣の出品人は各その事務所を設けて、事にあたれば、いはゆる平和的戦争の風雲は、當分の間大阪地方を益ふべし。會場の面積は、十萬八百坪にして、建築の館は、農林館、水産館、工業館、機械館、教育館、美術館、動物館、及び水族館等なり。その陳列の方法は、各館中に更に部類を立て府縣を分ちて、一目瞭然たらしむ、今出品部類目錄に依りて、その大概を記すべし。

第一部 農業及園藝

第一類 植物類

- 第二類 動物類
 - 第三類 製造飲食品
 - 第四類 肥料
 - 第五類 農業の方法
 - 第六類 農業及農産製造器類
 - 第七類 園藝
 - 第八類 有害及有益動植物
- 第二部 林業
- 第九類 林産物
 - 第十類 林業の方法
 - 第十一類 林業器具

第三部 水産

第十二類 漁業

第十三類 水産製造

第十四類 海鹽

第十五類 養殖

第十六類 水産業の方法

第四部 採鑛及冶金

第十七類 鑛物及土石

第十八類 冶金製品

第十九類 採鑛及冶金の方法

第五部 化學工業

第二十類 化學製品

第二十一類 釀造

第二十二類 陶磁器

第二十三類 七寶品及瑛瑯品

第二十四類 玻璃

第二十五類 セメント 石灰 石膏 漆 灰

第二十六類 紙及紙製品

第二十七類 鞣皮鞣革類

第二十八類 塗物類

第六部 染織工業

第二十九類 絲及綿類

第二十類 染織物類

第七部 製作工業

第三十一類 金屬製品

第三十二類 武器

第三十三類 雜工作品

第八部 機械

第三十四類 原動器

第三十五類 傳動機及機構

第三十六類 試驗機

第三十七類 電氣機械

第三十八類 運搬機

第三十九類 唧筒揚水機、送風機消防及火難救助器具

第四十類 乾燥及冷却裝置並煖房用器具

第四十一類 農林園藝及水產用機械

第四十二類 採鑛冶金機械

第四十三類 化學工業機械

第四十四類 染織工業用機械

第四十五類 製造機械

第四十六類 印刷機械

第四十七類 工作機械器具

第四十八類 土木建築機械器具

第九部 教育學術衛生及經濟

- 第四十九類 教育
- 第五十類 學術
- 第五十一類 醫學及衛生
- 第五十二類 測定器
- 第五十三類 寫真及印刷
- 第五十四類 建築及土木
- 第五十五類 統計及經濟
- 第十部 美術及美術工藝
- 第五十六類 繪畫
- 第五十七類 彫刻
- 第五十八類 美術工藝

第五十九類 美術建築の圖案及摺型

以上

會場の正門は日本橋通りの突當りにして、正門を入れれば更に塔門あり。この塔門を入れれば即ち陳列諸館は左右に薨を聯ねて並び建り。御覽者は前記敷地の圖を能く心得て道順を誤らぬやうに、見おとさぬやうに心がくべし。若し一たび道を誤る時は無用ハ時間を費し、足を勞すること多くして得る處少かるべし。

陳列諸館の外に、會場内の重なる建物は、加奈陀館、各官省特別館、郵便電信館等なり。飲食諸店、休息店等は、工業館、教育館の裏手に設けあり。又正門に向ひて右には、各府縣の販賣店あれば、心のまゝに小品を購ひかへることを得べし。餘興は不思議館を初とし